

「開甘露門」の源流

——『幻住庵清規』附録「開甘露門」・訳注——

教学研究委員会編

(朝山一玄・徳重寛道・並木優記・野口善敬・廣田宗玄・矢多弘範(あいうえお題))

解説

野口善敬

我が国の臨済宗で現用されている日課経典の中にあつて、その来歴が明らかでないものに「開甘露門(大施餓鬼)」がある。孟蘭盆会や施餓鬼会に用いられる重要な存在であり、日常の朝課や先亡供養の際にも経典として頻繁に誦誦されている。日本曹洞宗においても、臨済からの影響で「大施餓鬼」として用いられており、「普通『若人欲了知』と云うて始める。地方により盆の棚経に読むお経なり」(『昭和訂補曹洞宗日課経大全』、永田文昌堂・昭和十五年)とされている。広く禅門で唱えられている重要な経典なのである。

しかし、一見して分かる様に漢文と陀羅尼が入り混じって羅列されたものであり、単独のまとまった経典ではない。また、典拠が明らかでない偈句や陀羅尼が大部分を占めてはいるが、出拠が不明な文章も組み込まれており、全体をそのまま纏まつた一つの経典として扱うには疑問が存する。もちろん宋版・明版などの大蔵経の類にもこの経典は全く収載されていない。

ただ、中国元代に普応国師こと中峰明本の名を冠した『幻住庵清規』が出されるが、この書に同名の「開甘露

門」という文章が付録されている。今回は、この中峰撰「開甘露門」の訳注を通して、日本で使用されている「開甘露門」の内容を考える足がかりとしたい。この解説並びに本文訳注を通読することによって、施餓鬼会もしくは盂蘭盆会を行う意義を考えるきっかけとなるならば幸いである。

一、『幻住庵清規』について

「開甘露門」が附録されている『普応国師幻住庵清規』は、「延祐丁巳（四年・一三二七）冬幻住沙門 書」の序文を付して刊行された書物である。序文の撰者名が「明本」と明記されていないし、またこの序文は『天目中峰広録』や『天目明本禪師雜録』に収載されていないため、中峰の自撰でない可能性が皆無とは言えないが、中峰在世中の撰述であるし、「幻住」という号が他用されたとも考え難い。題目に「普応国師」と冠されていることから、中峰の撰著と見て問題はなからう。

同書の中国刊本は現存しない。『新纂禪籍目録』（駒沢大学図書館編・昭和三十七年、p.93）に拠れば室町時代刊の五山版が成賢堂文庫および大東急記念文庫に存するというが未見である。その他、寛永二十年（一六四三）京都澤田庄左衛門刊の和刻本が駒沢大学等に存しており、大日本統藏経所収本（Z.212）はこれを底本としている（但し、統藏本には誤植等があるので注意が必要である）。

内容としては、『清規』部分は中峰門下の「一家之規」（Z.111・486c）であり、「庵主」（497c）や「副庵」（497d）などの項目が設けられていることから分かるように、幻住庵を運営していくための諸規則をまとめたものである。その中味は、①日資、②月進、③年規、④世範、⑤宮弁、⑥家風、⑦名分、⑧履踐、⑨撰養、⑩津送の十章からなるが、このうち①日資の一部は『天目明本禪師雜録』巻上に「日資須知」（Z.122・366a）として載せられ、

また⑥家風・⑦名分・⑧踐履の三章については『西天目祖山志』巻六に「法語」「開示」「家訓」「偈頌」などと並べてそれぞれ「家風」(24b～27a)・「名分」(27b～29b)・「履踐」(29b～31b)、訓童行の部分は「家訓」(23a)の中に編入されている」とそれぞれ項目を立て、小目も含めて全てそのまま収載されている。

中峰が住した幻住庵は、大徳三年(二九九)の冬に呉興(浙江省湖州)の下山(≡弁山)に営まれたものが最初であるが、その他にも、翌年冬、平江(蘇州)鴈蕩山に作られた幻住庵、及び結庵の時期は不明だが西天目山の師子巖の東岡にあった幻住庵の存在が知られている。『清規』中、諸行事の疏文の中に「湖州城西下山幻住庵」(486c)の名称が用いられており、呉興下山の幻住庵のために作成されたものであったことが知られる。付録の「開甘露門」についても、末尾の疏文に「大元国浙西道湖州路城北下山幻住禅庵沙門某甲」(506c)とあり、同様に下山幻住庵での使用を前提としたものである。

呉興幻住庵は、「弁山(≡下山)幻住庵記」(『中峰広録』巻三・50b～51b)に拠れば、中峰が平江幻住庵に移ってから朽ち果ててしまい、六年後の大徳九年(三〇五)、精嚴院の沙門森公を中心として、師禅上人・明然上人・珂月上人が協力して院山の麓に移し、延祐五年(三二八)に建て直して規模を大きくしたとされる。延祐五年と言えば『幻住庵清規』の序文が書かれた翌年であり、『清規』刊行は下山幻住庵経営のテコ入れの一環であった可能性もある。庵の運営としては、明然・師禅・珂月・□浄の四人が三年おきに輪番で庵主となっていたが、後に明然が正住、珂月が副住となつたとされる。疏文の庵主名が中峰の名前となつておらず、「沙門某甲」とされているのは、明然など中峰以外の僧侶が住持として使用することを配慮していたためであろう。

『幻住庵清規』附録の「開甘露門」は、中峰門下における施餓鬼会及び盂蘭盆会の法要の内容次第を示した儀軌である。これが元代における一般的な施食法要の形態であるのか、それとも幻住派独自の特殊なものであるのかは明らかでないが、中峰が奇を衒つて全てを独創したとは考えがたいし、多少の独自性はあるにしても、当時の中国における一般的な行事内容を下敷きとしたものであろう。

施餓鬼会と盂蘭盆会の両方の法会には、重複する部分が多いものの、個別の部分があり、それを一つの文章として続けて示してあるため、通読すると行事としての流れが分かりにくい。訳注の章分けに従つて、それぞれの行事の流れを示すと次のようになる。(《》は訳注の章分けの通番を示す。)

A	
施食法要	
【施餓鬼会】	【盂蘭盆会】
① 《1》大悲呪 ② 《2》啓白文 ③ 《3》奉請三宝 ④ 《4》焰口陀羅尼 ⑤ 《5》淨食加持偈 ⑥ 《6》施甘露水陀羅尼 ⑦ 《7》五如来	① 《1》大悲呪 ② 《2》啓白文 ③ 《3》奉請三宝 ④ 《4》焰口陀羅尼 ⑤ 《5》淨食加持偈 ⑥ 《6》施甘露水陀羅尼 ⑦ 《7》五如来

	C	B
疏	回向	受戒儀式
	⑮ ⑮ 心経・四句回向① ⑯ ⑯ 四句回向②	⑧ ⑧ 破地獄傷 ⑨ ⑨ 六道 ⑩ ⑩ 懺悔 ⑪ ⑪ 婦依三宝 ⑫ ⑫ 受戒 ⑬ ⑬ 四弘誓願 ⑭ ⑭ 発菩提心 ⑮ ⑮ 发菩提心
	⑮ ⑮ 心経・四句回向① ⑯ ⑯ 四句回向②	⑧ ⑧ 孟蘭盆 ⑨ ⑨ 六道 ⑩ ⑩ 倒懸解脱の方便 ⑪ ⑪ 懺悔 ⑫ ⑫ 婦依三宝 ⑬ ⑬ 受戒 ⑭ ⑭ 四弘誓願 ⑮ ⑮ 发菩提心
	⑯ ⑯ 宣疏(附録《封緘》)	

見ての通り、施餓鬼会の⑧と孟蘭盆会の⑧と⑩の部分が両法要の内容の大きな違いであり、訳注で言えば施餓鬼会の《8》と《10》が孟蘭盆会では《17》と《20》に入れ替わり、更に孟蘭盆会では回向の後に《21》の宣疏が加えられる。孟蘭盆会における疏の付加は、日本の永和二年(二三七六)に記された禅林寺本『瑩山清規』にも見えている(後述、尾崎氏論文 p.116 参照)。全体の分量としては施餓鬼会より孟蘭盆会の方が文章が長い

ことになる。

ただ、疏の有無を除けば、両法要ともその構成は同じであり、大悲呪で始まるA「施食法要」、懺悔・帰依三宝と続くB「受戒儀式」、心経を諷誦してのC「回向」の三つの部分からなっている。AとCとは餓鬼への供養であり、Bは六道の苦を脱するために戒を受け菩提心を発おこさせるといふ法要参加者のための儀式である。

そもそも餓鬼に対する直接の施食を説いた経典は、同本異訳である『仏説救面然餓鬼陀羅尼神呪経』と『仏説救抜焰口餓鬼陀羅尼経』の二つであるが、その主題は阿難尊者の「寿命延長」(「焰口餓鬼陀羅尼経」[2]・p.16)であり、その手段となるのが餓鬼への施食であった。しかも対象となる餓鬼は特定された存在ではなく、「その施しをなし終わったならば、その四方に数えきれない無数の餓鬼がいたとしても、…みんな腹一杯になり、そのもろもろの餓鬼たちは、ことごとく餓鬼の身を捨てて天上〔世界〕に生まれることになる(於其四方有百千那由佉恒河沙數餓鬼、悉皆飽滿、是諸鬼等、悉捨鬼身、生於天上)〔同上・p.16〕とあるように、世界すべての餓鬼の救済を目指すものであった。これに対して孟蘭盆会の典拠である『仏説孟蘭盆経』は、餓鬼道に墮ちた「亡母」(『孟蘭盆経』T16・779b)の救済を主題とし、「(七月十五日の僧自恣の日に)徳をそなえた世界中の僧侶に供養するならば、…現在の父母も、七世の父母(七回生まれ変わった前世の父母)も、すべての親戚も、(地獄・餓鬼・畜生という)三塗の苦しみを抜け出せる(供養十方大徳衆僧、…現在父母、七世父母、六種親屬、得出三途之苦)〔同上・779b〕という、父母親族に対する追薦救済を目指すものであり、しかも経中に餓鬼への直接の施食法や陀羅尼は説かれていない。そのため、施食に関する資料を網羅蒐集した南宋の宗曉編『施食通覧』(Z・〇二)にも、『面然餓鬼陀羅尼神呪経』など前の二経は収載されているものの、『孟蘭盆経』は入れられていない。

ともあれ、『面然餓鬼陀羅尼神呪経』等にしろ『孟蘭盆経』にしろ、餓鬼の直接の施食救済もしくは追薦による救済が主題であり、そこに受戒が盛り込まれる必然性はないのである。よって、『幻住庵清規』附録「開甘露門」

における受戒部分は、中峰独自の創出であった可能性が存する。戒律の重視は、もとより仏教の基礎ではあるが、元代においては中峰の師である高峰原妙に特に顕著であり、高峰は「当時の修行者が戒で自らを律することができないのを心配して、…毘尼ヒニを設けていた（今時學者不能以戒自律：乃有毘尼之設焉）」（『高峰原妙禪師語錄』卷下付録・明初撰行状、Z122・350a）とされ、「人に然指（指を焼く）して戒を受けさせていた（高峰和尚令人然指受戒）」（『中峰広録』卷二一之中「山房夜話中」、和刻本^{388c}）と言われる。中峰自身も頂相に描かれた像では左手の小指が欠損しており（并手誠之輔「中峰明本自贊像をめぐって」・『美術研究』三四三・二九八九）、自ら「戒は（仏）道の上であり、（仏）道は戒の中にある（戒即是道上之戒、道即是戒中之道）」（『天目明本禪師雜錄』卷下・示門禪人、Z122・388a）と戒の重要性を説いている。これによつて中峰の「開甘露門」に受戒が採り入れられている理由の一端が窺えよう。

三、日本現用「開甘露門」との関係

上述のように、『幻住庵清規』附録の「開甘露門」は、施餓鬼会・盂蘭盆会の法要次第が記された儀軌であるが、分量から見ると日本現用のそれとは大きく異なっている。日本現用の「開甘露門」は、いわば施餓鬼会・盂蘭盆会の法要儀軌中の陀羅尼や偈句の部分だけを取り出して羅列したものであり、通読しても全く意味をなさない。あくまで儀式で用いる重要な部分だけを抽出した抜き書き的な存在なのである。また、『幻住庵清規』附録「開甘露門」では、施餓鬼会・盂蘭盆会を問わず、法要の中に受戒が大切な要素として盛り込まれているが、日本現用の「開甘露門」はこれを欠いており、様相を異にしている。中峰が目指したものは、餓鬼の追薦供養と施主自身の受戒・発菩提心の二本立てであったのに対し、日本の施餓鬼会・盂蘭盆会は追薦供養に比重が偏っているのである。

とはいえ、『幻住庵清規』附録の「開甘露門」と日本現用のものとは、使用されている陀羅尼・偈句にかなりの類似点が見られ、両者の間には深い関わりがあったと考えられる。日本現用の「開甘露門」の成立について尾崎正善氏は、その論文『施餓鬼会に関する一考察(一)——宗門施餓鬼会の変遷過程——』(『曹洞宗宗学研究所紀要』第八号・一九九四)の中で、『幻住庵清規』で規定された臨済流の施餓鬼儀礼が日本に渡り、京都五山において受容される過程において更なる付加、独自性が盛り込まれたのである(頁123c)と言っておられる。恐らくこの指摘が正しいであろうことは、二つの「開甘露門」の比較によっても明らかに知ることができる。次に引くのは日本現用の「開甘露門」を内容によつて十三条に分け、便宜的に表題を付けたものであるが、○番号の上には各条の末尾の《》の番号は、『幻住庵清規』附録「開甘露門」の訳注の章を示している。また、それぞれの条について、典拠が明らかなものについては、原古志稽著『大施餓鬼集類分解』(禅文化研究所・江湖叢書・平成七年)などを参考にし、(一)で付記した。

※①破地獄偈

若人欲了知 三世一切仏 心観法界性 一切唯心造〔八〇卷本『華嚴経』卷一九(T10・102a~b)]《8》

※②帰依三宝

南無十方仏 南無十方法 南無十方僧〔『菩薩善戒経』卷一(T30・961a)、『法華三昧懺儀』(176・953c)など]《3》

※③縁起衆

南無本師釈迦牟尼仏 南無大慈大悲救苦観世音菩薩 南無啓教阿難尊者《3》《4》

※④焰口陀羅尼

南無薩婆 吽哆伽多 嚩盧枳帝 唵 三摩囉 三摩囉 吽〔『仏説救拔焰口餓鬼陀羅尼経』(T21・465a)、『仏説救

面然餓鬼陀羅尼神呪經 (T21·466a)《4》

※⑤施甘露水陀羅尼

南無蘇嚕婆耶 吽多伽多耶 多姪吽 唵 蘇嚕蘇嚕 婆耶蘇嚕 娑婆訶
〔《瑜伽集要救阿難陀羅尼焰口軌儀經》(T21·470c)《6》〕
焰口軌儀經 (T21·470c)《6》

⑥施乳海陀羅尼

南無三曼多 沒駄喃梵〔《瑜伽集要救阿難陀羅尼焰口軌儀經》(T21·471b)‘焰羅王供行法次第’(T21·375c)〕

※⑦七如來

南無寶勝如來 南無多寶如來 南無妙色身如來 南無廣博身如來 南無離怖畏如來 南無甘露王如來 南無阿彌陀如來〔《弘說救拔焰口餓鬼陀羅尼經》(T21·465a)〕四如來〔《瑜伽集要救阿難陀羅尼焰口軌儀經》(T21·471a)〕七如來《7》〔五如來〕

⑧往生呪

南無阿彌陀婆耶 哆吽伽多耶 哆膩耶哆 阿彌喇都婆毘 阿彌喇哆 悉耽婆毘 阿彌喇哆 毘伽蘭帝 阿彌喇 毘伽蘭哆 伽伽膩 伽伽耶 枳哆伽唎 娑婆訶〔《拔一切業障根本得生淨土神呪》(T12·351c)‘弘說阿彌陀經’附錄 (T12·348b)〕

※⑨淨食加持偈(八句偈)

神呪加持淨飲食 普施恒沙衆鬼神 願皆飽滿捨慳心 悉脫幽冥生善道 歸依三宝發菩提 究竟得成無上覺
功德無辺尽未來 一切衆生同法食〔《施食通覽》遵式撰‘施食法式’(Z101·215b)《5》〕

※⑩四句回向①

汝等鬼神衆 我今施汝供 此食遍十方 一切鬼神俱〔《施食通覽》遵式撰‘施食法式’(Z101·215c)《15》〕

⑪八句回向

以此修行衆善根 報答父母劬勞德 存者福樂壽無窮 亡者離苦生安養 四恩三有諸含識 三途八難苦衆生 俱蒙悔過洗瑕疵 尽出輪廻生淨土〔典拠不詳〕

※⑫四句回向②

願以此功德 普及於一切 我等與衆生 皆共成仏道〔『法華経』卷三「化城喻品第七」(T9・24c)〕〔16〕

⑬普通回向

十方三世一切諸仏 諸尊菩薩 摩訶薩 摩訶般若波羅蜜〔『禪宗決疑集』(T48・1014c)、「勅修百丈清規」卷五、卷下(T48・1138a、1152a)〕

このうち、⑦の七如来は、『幻住庵清規』附録では五如来となつてゐるし、その他の条についても陀羅尼の文字の異同などの違いはあるが、實質的に十三章のうち九章までが重なつてゐる。大筋において尾崎氏の指摘通りと考へて良からう。

⑧「往生呪」は、もともとは誦誦する本人に対して「阿弥陀仏が常にその頭の上において、日夜擁護してくれる(能誦此呪者、阿弥陀仏常住其頂、日夜擁護)」(T9・35c)という功德をもたらしめるものであるが、日本においてこの呪が葬儀の際に用いられてゐることを勘案するならば、追薦供養を補強する意味合いで後世付加された可能性が大きい。

また、①「破地獄偈」は、『幻住庵清規』附録では「施餓鬼会」の部分だけに用いられており、「孟蘭盆会」の部分には見えていないし、更には『幻住庵清規』附録で「孟蘭盆会」に用いられてゐる《17》《20》の部分には日本常用の「開甘露門」と重なつてゐる部分が全く存在しない。よつて、日本常用の「開甘露門」は『幻住庵清規』

附録の「施餓鬼会」の部分だけに拠ったものであり、本来、「盂蘭盆会」に用いるには不適切なものということになる。

その欠を補うものが⑩「八句回向」である。この八句は「その出所がつかまびらかではない（八句者未詳其出処）」（『大施餓鬼集類分解』・T16）とされ、經典等に典拠を見いだすことができないが、第二句の「父母の劬勞くろうの徳に報む答むいる（報答父母劬勞徳）」というのは明らかに『孟蘭盆経』の「父母の長養慈愛の恩に報むいる（報父母長養慈愛之恩）」（T16・779c）という内容を意識したものであり、この⑩の部分があればこそ、日本常用の「開甘露門」を父母追薦の供養としての「盂蘭盆会」に使用する積極的な意味づけが可能なのである。

日本常用の「開甘露門」を説明するには、今後、更に新たな周辺資料の発掘と詳細な比較研究が必要だが、それはまた別の機会を期したい。

（注）尾崎正善氏には、右に引用した論文以外に「施餓鬼会に関する一考察（2）」（『印度学仏教学研究』第四三卷第一号（通巻第八五号））がある。これらの論文の存在、及び曹洞宗での「大施餓鬼」の使用については、東京・永見寺の葛西好雄師より御教示を賜った。

【訳注目次】

《題目》

《1》大悲呪	(施餓鬼会1、孟蘭盆会1)	
《2》啓白文	(施餓鬼会2、孟蘭盆会2)	〃
《3》奉請三宝	(施餓鬼会3、孟蘭盆会3)	〃
《4》焰口陀羅尼	(施餓鬼会4、孟蘭盆会4)	〃
《5》淨食加持偈	(施餓鬼会5、孟蘭盆会5)	〃
《6》施甘露水陀羅尼	(施餓鬼会6、孟蘭盆会6)	〃
《7》五如来	(施餓鬼会7、孟蘭盆会7)	〃
《8》破地獄偈	(施餓鬼会8)	矢多 弘範
《9》六道	(施餓鬼会8)	〃
《10》懺悔	(施餓鬼会9)	〃
《11》娣依三宝	(施餓鬼会10、孟蘭盆会12)	徳重 寛道
《12》受戒	(施餓鬼会11、孟蘭盆会13)	〃
《13》四弘誓願	(施餓鬼会12、孟蘭盆会14)	並木 優記
《14》発菩提心	(施餓鬼会13、孟蘭盆会15)	〃
《15》心経・四句回向①	(施餓鬼会14、孟蘭盆会16)	〃
《16》四句回向②	(施餓鬼会15、孟蘭盆会17)	〃
《17》孟蘭盆	(孟蘭盆会8)	野口 善敬

〔訳注原稿担当者〕
廣田 宗玄

《18》六道

(孟蘭盆会9)

《19》倒懸解脱の方便

(孟蘭盆会10)

《20》懺悔

(孟蘭盆会11)

《21》宣疏

(孟蘭盆会18)

《封緘》

朝山一玄

”

”

”

”

【訳注凡例】

○この訳注は『幻住庵清規』附録「開甘露門」を、23の部分(1〜21と題目・封緘)に章分けし、それぞれの章を「原文」「校注」「書き下し文」「口語訳」「語注」の順で*で区切つて掲載した。

○底本には寛永二十年(一六四三)京都澤田庄左衛門刊の和刻本(福岡市聖福寺所蔵本)を用い、『大日本統蔵経』所収本(通冊第一二)との間で校勘を行った。

○原文は当用漢字を用い、書き下し文は現代かな使いとす。

○現代語訳は直訳を心掛けたが、必要と思われる場合は「」で適宜ことばを補った。

○訳注作業に際しては段落分けを行い、担当者に割り当てて訳注の下書きを作成し、合同で討議を行った。そのため、気を付けたつもりではあるが、担当者により訳語・付注などに若干の差異が存している。

○注に引用した書籍については、その初出の箇所を版本等を明記した。また大正大蔵経・大日本統蔵経(出統蔵)についてはそれぞれ「T」「Z」の略号を用いた。その他の略号は次の通り。

『中村』 中村元『仏教語大辞典』(東京書籍)

『広説』 同 『広説仏教語大辞典』(同前)

『望月』 Ⅱ望月信亨 『仏教大辞典』(世界聖典刊行協会)

『禅学』 Ⅱ駒沢大学 『新版禅学大辞典』(大修館書店)

『織田』 Ⅱ織田得能 『仏教大辞典』(大倉書店・大蔵出版)

『岩波』 Ⅱ中村元等編 『仏教辞典』(岩波書店)

『大漢和』 Ⅱ諸橋轍次 『大漢和辞典』(大修館書店)

〔付記〕原稿の読み合わせに際しては、担当者以外にオブザーバーとして玄侑宗久師にも参加頂き、貴重な意見を頂戴した。

【訳注本文】

《題目》

開甘露門

普施法食文

開甘露門

普く法食〔1〕を施す文

*

開甘露門

普く法食たぐものを施す〔法要に用いる〕文

*

*

(一) 施法食 律に適った食物を施すこと。 (一) では「施餓鬼」の「いへ」。 (註中村) p.1232)

《一》大悲呪(施餓鬼会1、盂蘭盆会1)

大悲神呪三遍、灑浄水

*

『大悲神呪』三遍、浄水を灑ぐ。

*

『大悲神呪』を三遍誦んで、浄水を注ぐ。

《2》啓白文(施餓鬼会2、盂蘭盆会2)

切以、神心不動、法性遍周。既無生滅之因、安有昇沈之跡。無上法王、坐宝蓮花、成等正覺、曾何一法之加。蠢動含靈、入微塵國、變化死生、曷有纖塵之損。由是、龍女証果於猷珠之頃、広額成仏於放刃之間。何男女之有分、豈善惡之能間。当其迷也、即宝糸網、咸是鉄囿。及至悟時、惟劍刃山、俱成金地。故名教有言、生而無

生、法性湛然。無生而生、業果儼然。是謂法無定相、隨念變遷者也。

今則法筵大啓、妙供前陳、然五分之真香、請十方之至聖、散一器之甘露、濟六道之同靈、宣密語以加持、運誠心而拯拔。欲明至理、故白斯文。仏事円成、同皈真際。執手躬。

*

切に以れば、神心は不動にして、法性は遍周す。既に生滅の因無し、安くんぞ昇沈の跡有らん。無上なる法王、宝蓮花に坐し、等正覺を成ずるも、曾て何ぞ一法を加えん。蠢動含靈、微塵國に入つて變化死生するも、曷ぞ織塵の損有らん。是れに由りて、龍女、珠を献ずる頃に於いて証果し、広額、刃を放つ間に於いて成仏す。何ぞ男女の分有らん、豈に善惡の能く問てんや。其の迷に当たるや、即ち宝糸網、咸く是れ鉄圍たり。悟る時に至るに及んで、惟だ劍刃山も、俱に金地と成る。故に名教に言える有り、「生じて無生なれば法性湛然たり、無生にして生ずれば業果儼然たり」と。是れ「法に定相無く、念に随つて變遷す」と謂う者なり。

今ま則ち法筵大いに啓き、妙供前に陳ね、五分の真香を然き、十方の至聖に請い、一器の甘露を散じて、六道の同靈を濟い、密語を宣べて以て加持し、誠心を運らして拯拔す。至理を明らめんと欲するが故に斯の文を白す。仏事円成して同に真際に皈らんことを。手躬を執る。

*

つらつらと考えてみるに、「元來」靈妙なる心は不動であり、諸法の本性は「法界に」周遍している。もとより生死の因となるものなど無いからには、どうして「地獄道・餓鬼道・畜生道・修羅道・人間道・天道の」六道を昇沈することなどあるうか。無上の法主たる仏は、宝蓮華の座にあつて等正覺を得るが、「それによつて」一法も（心に）付け加わる訳ではない。蠢動含靈は、微塵國の中で姿を変えつつ生死を繰り返すが、「それによつて」どうして織塵も（心が）損なわれることなどあるうか。だから、龍女は宝珠を「仏に」献上する時に

悟り、広額屠児は屠刀を捨てた時に悟つたのだ。「そこに」どうして男女の差があるのか、どうして善悪の隔てがあるのか。迷っている時には、「浄土を飾る」宝糸網たひき糸網がそのまますべて鉄圍山となり、悟ると同時に「地獄の」剣山やまが金地浄土となるのだ。だから名教名教に次の言葉がある、「生じても無生であれば、諸法の本性が「そのまま」湛然ゆつたりとしているが、無生でありながら生じれば、善悪の行為によつて生じた報いが厳然として存在する」と。これを「法法に決定まつた姿はなく、想念に應じて変化する」と言うのだ。

今こうして法会を盛大に開き、妙供お供えが前に並べられ、五分の香を焚いて、十方の大聖ほとけに願ひ、一杯の甘露水けいれい水を撒まいて、六道の同靈なにかまを助け「るために」、密語秘傳の言葉を述べて加持所持し、誠心まことこころを尽くして拯救抜いせう出としている。「この法会を通して」至上の道道「理を明らかにしたいから、この文を啓申し述べ白べる。仏事が無事おむつ円ま成じて、「どうかみな」共に真本来の境地際に到まりますように。柄香えいろう炬こを執とる。

*

- (1) 心神しんしん「心神」ともいう。衆生の靈妙な心性。衆生の心は靈妙であるから、神という字を付け加えている。『中村』p.767)
- (2) 法性ほふじやう「諸法しよほふ（諸存在・諸現象）の眞実なる本性、万有の本体をいい、仏教の眞理を示す語の一つで、眞如・実相・法界などの異名として用いられる。『中村』p.1252)
- (3) 生滅しやうめつ因いん「一切有為法における生と滅のこと。有為法である以上、生ずれば滅することは不可避である。ここでは、心性・法性共に本体としての眞性があるにも拘わらず、何故に生滅があるのか、ということ。」
- (4) 昇沈しやうしん跡あと「流転のこと。迷妄のために六道・四生の間を生まれ変わり、迷いの世界をさすらうこと。」
- (5) 宝蓮ほうれん花か「仏の座。転じて宇宙の生起する根源をたとえていう。『中村』p.1246)
- (6) 微塵ゑいじん國こく「微塵」は非常に微細なことをいうが、転じて甚だ数の多いことをいう。無数の世界のこと。」
- (7) 龍女証果りゆうにょしやうくわ於お猷い珠しゆ之の頃ころ「『法華經』卷十二「提婆達多品」に見える龍女成仏のこと。龍女は娑竭羅龍王の八歳の娘。」

幼くして行解共にすぐれ、不退転の境地を得て速やかに悟りに至った。舍利弗は、女人には五つの障りがあるにも拘わらず、龍女が女人の身でありながら悟ることが出来るのかどうか不信に思った。しかし龍女は、一つの宝珠を仏に呈し、仏がそれを忽ち受け取ったことよつて、自らの成仏が、仏がその珠を受け取るよりも速やかであったことを表明して女身が転じて男子になり、仏の悟りを得るのである。「爾の時、龍女に一宝珠有り。卍直三千大千世界なり。持して以て仏に上る。仏、即ち之を受く。龍女、智積菩薩、尊者舍利弗に謂つて言わく、〈我れ宝珠を獻じ、世尊納受す。是の事、疾きや〉と。答えて言わく、〈甚だ疾し〉と。女、言わく、〈汝の神力を以て、我が成仏を觀よ。復た此れよりも速やかなり〉と。」(T9・35c)

(8) 広額成古於放刃之間 、『涅槃經』「梵行品」に見える広額屠兒の話にもとづく。しかし、『涅槃經』では、無量の羊を殺す日々を送つていた広額という名の屠兒が、ある日、舍利弗と出会い、八戒を受けたことよつて、屠兒が命終の後、北方の天王毘沙門の子となり、如来の弟子となつて大功德を得た(「北本」T12・479b、「南本」T12・722b)とするのみで、ここで言われる即疾成仏に関する記述はない。広額屠兒の話が即疾成仏に重点を置いて引用されるのは禪家に於いてである。例えば大慧宗杲は、広額屠兒の話を、先に挙げた龍女成仏や、『華嚴經』「入法界品」の善財童子の話と共に頻用する。「涅槃会上の広額屠兒、屠刀を放下して便ち成仏す。」(『大慧語錄』卷二六・T47・922a)

この点について無著道忠は次のように説く、「忠曰く、涅槃の文、此くの如し。然るに『宗鏡録』十七に曰く、『涅槃經』に云うが如きは、屠兒広額、日、千羊を殺す。後に発心し已む。仏の言わく、〈腎劫の中に於いて成仏せん〉と、云々。『宗鏡』広額を以て歓喜の事に捏合す。禅録に到つて往々に道う、〈広額屠兒、屠刀を放下して我が千仏の一教と称す〉となり。其の經に違ふこと此くの如し。」(『虚堂録犁耕』上、禅文化研究所本・p.147a)。

(9) 何男女之有分 』仏教では古来、女性はやが多く成仏出来ないものとされた。先に挙げた『法華經』にも女性には五障があるとされ、梵天王・帝釈・魔王・転輪聖王・仏身の、全てになることが出来ないこととされる。しかし、禅家ではこ

のような思想は薄く、唐代では龐居士の娘、靈照は諸々の禪者と対等に渡り合ひあつたとされ、大慧宗杲には多くの女性の嗣法者がいる。

(10) 宝糸網ト美しい糸で編んだ網。「林木池沼、皆な法音を演べ、光を交えて相い羅らなること宝糸網の如し」(『首楞嚴經』卷六・T19・130a)。こゝでは阿弥陀浄土の「七重羅網」(『阿弥陀經』)、「七重網」(『觀無量壽經』)を念頭に置いた表現であろう。

(11) 鉄閉ト「鉄閉山」のこと。「鉄輪閉山」ともいう。仏教の世界観では須弥山を中心に九山八海がこれを取りまくが、その最も外側の鉄で出来た山をいい、さらにその外海中にあるのが、我々が住する閻浮提洲であるとする。また三千世界の各々を一つの鉄閉山が閉むとする説もある。(『中村』p.978)

(12) 剣刃山ト「剣樹刀山」のこと。十六小地獄の一つで、そこには剣を葉とした樹が無数に生えており、罪人がこの地獄に入ると、大風が剣の葉を揺らし、罪人の身体に落ちて傷つけるといふ。(『中村』p.330)

(13) 金地ト浄土の大地のこと。『阿弥陀經』に「彼仏国土(西方浄土)、常作天樂、黃金為地」とあるのを踏まえる。

(14) 名教ト聖人の教え。仏教のこと。これは儒教の表現を転用したものとされる。(『中村』p.1299)

(15) 湛然トおちついて静かなさま。(『大漢和』卷七・p.133)

(16) 業果ト業の果報。善悪の行為(業)によつて招いた報い(果報)。(『中村』p.406)

(17) 生而無生、法性湛然。無生而生、業果儼然ト引用不詳。

(18) 法無定相、隨念變遷トそのままの語は見えない。似た表現として『宗鏡錄』卷二四に、「法無定相、回轉由心」(T48・553a)がある。総ての存在は縁起によつて成り立っているのであり、常住不變の相を持たないということ。「定相」は、定まつた特質。定まつた本質。(『中村』p.749)

(19) 法筵ト法のむしろ。法のための集まりをいう。法座ともいう。經を講じたり、法話をしたりする席。(『中村』p.1229)

(20) 十方至聖ニあらゆる仏。施餓鬼法会では、設たえた施餓鬼棚の正面に、「三界万靈」と記された木牌を供える。「三界万靈」とは、三界（欲界・色界・無色界）の、総ての靈のこと。迷界を指す。一方「十方至聖」とは、出世間の仏を指し、この二句によつて聖俗総てに対する供養を行なうことを表明する。

(21) 甘露ニ amita・amata の漢訳。神々（諸天）の常用とする飲料。これを飲むと不老不死となるという。その味が蜜のように甘いと言われることから甘露と言ひ、陶然とさせる美味なものに対しても用ひ、酒のことという。〔中村』p.185〕

(22) 六道ニ衆生が作る業によつて生死を繰り返す六つの世界。地獄道・餓鬼道・畜生道・修羅道・人間道・天道の六つ。〔中村』p.1457 参照〕

(23) 加持ニ祈祷のこと。祈祷は仏力を信者に加付し、信者にその仏力を受持させるから、祈祷をまた加持という。手に仏の印契を結び（身密）、口に仏の真言を唱え（口密）、心も仏も心境になる（意密）と、すなわち仏の三密と衆生の三業とが感応して成仏できると説く。したがつてそれを実現するように祈るのである。その修法について加持供物や加持香水などがあり、時には護摩もたく。民間で病人加持・井戸加持・帯加持（安産を祈る）などもつばら現世利益の祈祷として広まつた。加持祈祷と並称する。〔中村』p.146 参照〕

《3》奉請三宝（施餓鬼会3、盂蘭盆会3）

戒香・定香・慧香・解脱香・解脱知見香、光明雲台、徧周法界。

一心奉請。尽虚空、遍法界、徧塵刹土中過・現・未來、常住仏陀耶衆・達磨耶衆・僧伽耶衆。

一心奉請。參隨三宝、擁護一乘。光明会上、方等位中、外現威嚴、内秘慈忍、諸天菩薩・八万金剛・十千天子。積菩提因、受如来記、在在處處、嚴淨法筵、引領群龍、無辺部從、不忘本願、來降道場。惟願普薰証常樂。法

界人天亦如是。仰啓大慈悲父無上法王、弘無作之至慈、鑒有情之微愴。

南無十方仏 南無十方法 南無十方僧 南無大慈大悲觀世音菩薩 三遍

〔校注〕(一)香ニ統藏本に無し。

戒香・定香・慧香・解脫香・解脫知見香、光明なる雲台、法界に徧周す。

一心に奉請す、虚空を尽くし、法界に徧く、微塵刹土中の過・現・未來、常住なる仏陀耶衆・達磨耶衆・僧伽耶衆を。

一心に奉請す、三宝に參隨して一乘を擁護し、光明なる會上、方等位の中、外に威嚴を現じ、内に慈忍を秘せし諸天の菩薩、八万の金剛、十千の天子を。菩提の因を積み、如來の記を受け、在在處處、法筵を嚴淨して、群龍・無辺部從を引領して本願を忘ぜず、道場に來降したまへ。惟だ願わくは普ねく薫じて常樂を証さんことを。法界人天も亦た是くの如くならんことを。仰いで大慈悲父無上法王に啓す、無作の至慈を弘め、有情への微愴を鑑したまへ。

南無十方仏 南無十方法 南無十方僧 南無大慈大悲觀世音菩薩 三遍。

*

戒香・定香・慧香・解脫香・解脫知見香を薫じ、光り輝く〔焚いた香の〕煙が法界に徧く広がる。〔その中で〕一心に讚えます、虚空いっばいに広がり、法界に遍き、無數の国土の中の、過去・現在・未來〔の三世〕に常住である仏・法・僧を。

一心に讚えます、三宝に付き従い、一乘の教えを守り、光明なる法会の中にあつて、見かけでは嚴肅な姿を現わし、心中には慈悲と忍耐を隠し持った、諸天の菩薩、八万の金剛力士、一万の天子方を。悟りへの因を積

み、如来の記を受け、在在処処で開かれる法会を清浄ならしめ、龍神の群れや無数のそのしもべ達を引き連れて、本願を忘れず、道場に降りて来られますように。どうか、普く香を薫じて永遠で安楽なる涅槃の境地を証して下さい。法界の人々もまたこのようでありませうに。謹んで大慈悲の父であり無上の法王である釈迦如来に申し上げます。無為なる、この上ない慈悲を弘め、有情への微かな真心を照し出して下さい。

十方仏に帰依します 十方法に帰依します 十方僧に帰依します 大慈大悲観世音菩薩に帰依します。

三回繰り返す。

*

(1) 戒香・定香・慧香・解脱香・解脱知見香 五分法身の功德を各々香に喩える。「五分法身」とは、上記の五つの法〔徳性〕を身体とする者。究極のさとりに達した聖者〔無学位の羅漢〕と仏が、この五つを具えているという。〔中村〕p.375

参照)

(2) 雲台 光輝く雲。ここでは薫じた香の煙のこと。

(3) 戒香：偏周法界 焼香、あるいは焚香は、元来印度に於いて身の垢臭を除く為に始められたものであるが、その煙が四散することから遍至法界の義があるとされ、また仏等を迎請する行事となすこともある。ここでは後者の義。〔望月〕

p.2597 参照)

(4) 奉請 いうやうやくしく仏・菩薩・諸神などを讃すること。〔中村〕p.1183)

(5) 仏陀耶衆 仏のこと。『大施餓鬼集類分解』に云わく、〈仏〉というは、具には〈仏陀耶〉と云う。此には〈覺者〉と翻す、三覚を備うる故に。又た〈智者〉と翻す、知らざることを無きが故に」と。(p.44)

(6) 達磨耶衆 法のこと。『大施餓鬼集類分解』に云わく、「梵語には〈達磨耶〉、華には〈法〉と言う。軌持を以て義と為す。謂く、物に軌つて解を生ずるも、自性を任持つが故に」と。(p.45)

- (7) 僧伽耶衆ニ僧のこと。『大施餓鬼集類分解』に云わく、「梵語には〈僧伽耶〉、略して〈僧〉と曰う。此には〈衆和合〉と翻す。四人已上合あひまひ、聖法を御まめ、理事和合して、同じく修し同じく証するが故に」と。(p.46)
- (8) 方等位ニ「方等」は、「方広」・「毘仏略」などともいい、広く法を説くことをいう。ここでは法会のこと。(『望月』p.4326 参照)
- (9) 金剛ニ金剛力士のこと。執金剛・金剛夜叉などともいう。金剛杵を手にとつて仏法を守る神。門の左右に立つて寺を守る力士。(『中村』p.422)
- (10) 天子ニ前世に中品下品の十善を修して人中に生じて国王となるもの。諸天に護持せらるれば天子と名く。(『織田』p.1249)
- (11) 群龍無辺部ニ龍の群れとそのしもべたち。
- (12) 常樂ニ「常樂我淨」の上の句。「常樂我淨」とは、ニルヴァーナの四徳のこと。ニルヴァーナは永遠であり(常)、安樂に満ち(樂)、絶対であり(我)、清淨である(淨)ためである。特に「涅槃經」に説く。(『中村』p.753)
- (13) 無作至慈ニ作為の無い最上なる慈悲。無為なる慈悲。
- (14) 南無十方仏、南無十方法、南無十方僧ニ「帰依三宝」という。仏・法・僧の三宝に帰依するを以て、仏教徒たることを表明する。

《4》焰口陀羅尼(施餓鬼会4、盂蘭盆会4)

皈命釈迦大慈父、無上宝印捺持門、取伝神呪觀世音、起教阿難諸聖衆。我今依經誦密語。爰茲飯食濟群生。願賜威光攝視佗、受施功德皆成就。

毘謨 薩嚩怛佉夔跢 嚩路枳帝 唵 三跋囉三跋囉 吽 七遍。

皈命す⁽¹⁾釈迦大慈父、無上なる宝印総持門、神呪を取⁽²⁾伝せし観世音、教を起こせし阿難⁽³⁾諸聖衆に。我れ今ま經に依つて密語を誦し、茲の飯食を變じて群生を濟わんとす。願わくは威光を賜つて佉を撰視し、功德を受施し、皆な成就せんことを。

毘謨 薩嚩怛佉夔跢 嚩路枳帝 唵 三跋囉三跋囉 吽 七遍

大慈の父なる釈迦牟尼仏、無上なる仏の教えを頂く陀羅尼、陀羅尼を伝持する観音菩薩、教えを起こした阿難と諸々の聖者達に全てを捧げます。私は今、經に依つて密語を唱え、この飯を「たくさんの飯に」變えて「餓鬼道に墮ちた」衆生を救おうとしています。どうか威光で照らして衆生を見守り、功德を授け施していただき、皆が「悟りを」成就致しますように。

毘謨 薩嚩怛佉夔跢 嚩路枳帝 唵 三跋囉三跋囉 吽 七回繰り返す。

(1) 帰命 〓いのちをささげて。心からのまことをささげる。たのみたてまつる。自己の身命をさし出して仏に帰趣すること。

帰依。帰順。(『中村』p.215)

(2) 総持門 〓総持の法門。「総持」とは、善を保持して失わないようにし、悪は起らないようにする意。諸仏の所説をよくたもつて忘失しないこと。陀羅尼。(『中村』p.877)

(3) 起教阿難 〓『大施餓鬼集類分解』に云わく、「南無啓教阿難尊者」(啓教)と言うは、如来の一代時教は、阿難の結集に因つて天龍宮に流布す。阿難、過去空王仏の所に於いて、已に如来と同時に発心す。今日方便して伝法の人と為ること

を示す。故に啓教と唱う。又た専ら施食の教法を啓く。故に『開甘露門』には「起教阿難」と称す。此れと同意なり。
と。(p.51)

(4) 眞謨 薩嚩怛佉薩跢 嚩路枳帝 唵 三跋囉三跋囉 吽 焰口陀羅尼。この陀羅尼は、『仏説救拔焰口餓鬼陀羅尼經』では「無量威徳自在光明殊勝妙力陀羅尼」(T21・466c)、『仏説救面然餓鬼陀羅尼神呪經』では「一切徳光無量威力陀羅尼」(T21・466a)と名づけられている。釈尊が前世バラモンであつた時、觀世音菩薩、及び世間自在威徳如来の所で受けた陀羅尼であり、この陀羅尼を呪すれば、その功徳により、餓鬼はおろか、バラモンや仙人に到るまで、無量の飲食を施与することが出来、更に彼らを天上または浄土に生れさせることが出来るとされる。意味は、「一切の如来に觀られしものに(または、一切の如来と觀(自在菩薩)に)、娑命いたします。オーン、集めたまえ、集めたまえ(または、養いたまえ、養いたまえ)、フーン」。訳と詳細は、木村俊彦・竹中智泰『禪宗の陀羅尼』(大東出版社・二〇〇三年・p.166-168) 参照。

《5》淨食加持偈(施餓鬼會5、孟蘭盆會5)

神呪加持淨飲食、普施河沙衆鬼神。願皆飽滿捨慳心、即脫幽冥生善道、皈依三宝發菩提、究竟得成無上覺。功德無辺尽未來、一切衆生同法食。

*

神呪もて淨飲食を加持し、普く河沙衆鬼神に施す。願わくは皆な飽滿して慳心を捨て、即ち幽冥を脱し、善道に生じ、三宝に皈依し、菩提を發して究竟じて無上覺を成ずるを得、功德、尽未來に無辺にして、一切の衆生と法食を共にせんことを。

神呪タラニにて清らかな食物新辨に加持し、広く河沙衆鬼神無数の鬼神に施します。どうか皆が満腹になって、慳物惜しみの心を捨て、すぐさま幽冥幽冥から脱して善趣善い所に生まれ、三宝に帰依し、菩提心を起こして無上の悟りを成ずることが出来ますように。〔そして、その〕功德が未来永劫限りなく〔続き〕、一切の衆生と法食を共にしますように。

(1) 神呪加持淨飲食：以下の八句は遵式の「施食法式」(『施食通覽』・Z101・215b)に見える。

(2) 慳心：自分のものを他人に与えることを惜しむ心。ものおしみや貪りの煩惱が心を覆って、布施の実践を不可能にすることをいう。六蔽心の一つ。これをなおすためには、布施と無常などを念ずることを必要とする。(『中村』P.328)

(3) 幽冥：くらやみ。暗黒。迷いの暗黒。無明をたとえていう。(『中村』P.1386) ここでは、地獄や餓鬼道といった地下の暗い世界のこと。

(4) 善道：善い所。天上・人界の二趣。天などの善趣。六道の中で、比較的に楽しみのある境界。(『中村』P.851)

《6》施甘露水陀羅尼(施餓鬼会6、盂蘭盆会6)

南無 素嚕幡耶 但佉揭多耶 但姪佉 唵 素嚕 素嚕 幡囉素嚕 幡囉素嚕 莎訶 一七遍。

南無 素嚕幡耶 但佉揭多耶 但姪佉 唵 素嚕 素嚕 幡囉素嚕 幡囉素嚕 莎訶ソモコト 一七遍。

南無 素嚕幡耶 但佉揭多耶 但姪佉 唵 素嚕 素嚕 幡囉素嚕 幡囉素嚕 莎訶 一七回(一七回)繰り返す。

(1) 南無 素嚕幡耶 怛佉揭多耶 怛姪佉 唵 素嚕 素嚕 幡囉素嚕 幡囉素嚕 莎訶 施甘露水陀羅尼。『瑜伽集要
 救阿難陀羅尼焰口軌儀經』(T21・470c)の中に見える呪。ただし『焰口軌儀經』では、「曩謨素嚕播耶 怛他誡哆野
 怛爾也他 唵 素嚕素嚕 鉢囉 素嚕 鉢囉 素嚕 娑嚕賀」とする。この陀羅尼を呪すると、飲物・食物・水は
 全て無量の乳、及び甘露水に変化し、また一切の餓鬼の喉を開き、彼らと餓鬼達に豊富に、しかも平等に喫せしめ
 とされる。意味は、「妙なる姿の如来(妙色身如来)に帰命いたします。すなわち以下のごとし。オーン、流れ出で
 たまえ、流れ出でたまえ、さらに現われ出でたまえ、さらに現われ出でたまえ、スヴァーハー」。〔前掲『禪宗の陀
 羅尼』p.169〕

《7》五如来(施餓鬼会7、盂蘭盆会7)

南無多宝如来 南無妙色身如来 南無広博身如来 南無離怖畏如来 南無甘露王如来
 唵 誡誡曩 三婆嚩 鞞日囉 斛 三遍 人座鳴尺二下。

南無多宝如来 南無妙色身如来 南無広博身如来 南無離怖畏如来 南無甘露王如来⁽¹⁾
 唵 誡誡曩 三婆嚩 鞞日囉 斛 三遍して座に入り、鳴尺すること二下す。

多宝如来に帰依します 妙色身如来に帰依します 広博身如来に帰依します 離怖畏如来に帰依します
 甘露王如来に帰依します

唵オン 譏ギヤクノ 識シキ 疑ギ 三サ 婆バ 嚩ハ 鞞ワラジユウ 日ジツ 囉ラ 斛コク

三回唱えて座に入り、尺を一度唱らす。

*

(一) 南無多宝如来：南無甘露王如来。現在の禅宗では通常「七如来」(①宝勝如来・②多宝如来・③妙色身如来・④広博身如来・⑤離怖畏如来・⑥甘露王如来・⑦阿弥陀如来)で構成されているが、ここでは②③④⑤⑥の五つを取る。『焰口餓鬼経』では、②③④⑤の四つで「四如来」とするが、ここではそれに⑥を加えた「五如来」としている。しかし、宝勝如来と多宝如来、甘露王如来と阿弥陀如来はそれぞれ同一異名の如来であるから、本来ならば五如来を説くだけで十分であると言えよう。

*南無多宝如来。『南無』は婦命・婦敬・婦礼・敬礼・信従などと漢訳する。婦順して信じることの表明。「多宝如来」は宝生(宝勝)如来のこと。なくなられた後に『法華経』「見宝塔品十二」の説かれるべき在々処々に出現して、(そのとおりだ)『善哉』と唱えることによつて、それを証明しようという本願をもつ仏のこと(『中村』p.899)。真言密教の金剛界曼陀羅は、大日如来を中心に周圍に四つの仏を配することによつて構成され(五如来)、多宝(宝生・宝勝)如来は、その南方に位置する。『大施餓鬼集類分解』では、「此の名号を唱うれば、無数の餓鬼、之れを聞いて貧窮を転じて福德圓滿す」(p.55)と述べ、更に「夫れ以れば、過去に慳吝の旧因を結んで、現世に貧窮の賤果を熟す。是の故に水に向えば火と化し、食を得れば炭と成る。無福の餓鬼、無財の餓鬼、是れなり。今ま方に多宝如来の尊号を唱うれば、困苦の業因を脱して、常樂我淨の法味を受く」(同上)と述べて、財の功德があるとす。

*南無妙色身如来。『妙色身如来』は阿閼如来のこと。五如来のうち、東方に位置する。『大施餓鬼集類分解』では、「此の名号を唱うれば、咽は針の如く、腹は山の如くにして醜形飢渴する餓鬼、妙色身と転ずるなり」と述べ、更に、「夫れ閉戾多の道は、身色土炭、頭髮蓬乱、臭毛の身に生ること針の如く、腹は大にして山の似く、手足は筋よりも細く、飢渴の苦惱、自ら忍び難し。是に於いて如来の宝号を唱うれば、皆な妙色身と変ず。譬えば蝶の桑虫を祝つて『似我

類我（我に似、我に類せよ）』と唱うる則は、土穴の蠢動の類、頓に空飛の羽虫と成るが如し。況や如来の神呪、加持の力をや」（p.66）と述べて、餓鬼が第八地以上の菩薩に転ずる功德があるとす。

*南無広博身如来Ⅱ「広博身如来」は、真言密教の教主である大日如来の異名。密教ではあらゆる仏菩薩の中で最高位にあるとされる。五如来のうち、中央に位置する。『大施餓鬼集類分解』では、「此の名号を唱うれば、餓鬼の咽喉広博うして食を受けて飽満す」（p.66）と述べて、食の功德があるとす。

*南無離怖畏如来Ⅱ「離怖畏如来」は、釈迦如来の異名。五如来のうち、北方に位置する。『大施餓鬼集類分解』では、「此の名号を唱うれば、餓鬼、刀杖の呵責を免れて一切の怖畏を離る」（p.67）と定義し、更に、「餓鬼道は但だ飢渴の苦に逼迫らるるのみに非ず。致る所、恐怖多し。今、怖畏の念を離却れて安楽の妙境に証入せしむるは、即ち是れ如来の功德力なり」（p.68）と述べて、あらゆる責めや畏れから離れる功德があるとす。

*南無甘露王如来Ⅱ「甘露王如来」は、阿弥陀如来の異名。五如来のうち、西方に位置する。『大施餓鬼集類分解』では、「此の名号を唱うれば、無数の餓鬼、甘露の飲食を服するに非ざるも、如来上妙の法味を受くることを得て、甘露の飲食と成して、悉く苦難を免る」（p.68）と述べ、更に、「蓋し閉多道は、鮮膳の美食も処に土炭に変じ、清涼の冷水も火と為り血と為る。皆な悪業の力を以てなり。今、甘露王に帰依すれば、臭悪の穢食も八種の上味と化し、七粒の心施も七七斛と成る。猛火深垢の、清涼の玉池と変ずることは、皆な仏力善業の力を以てなり」（同上）と述べて、飢えを免れる功德があるとす。

(2) 唵 譏譏婁三婆嚩鞞日囉斛Ⅱ「虚空藏真言」と呼ばれ、『大日如来剣印』（T18・197a）等に見える。意味は、「オーン」。虚空より生まれし者よ。金剛なるものよ。ホーホッ！」。因みに宋代の宏智正覚は、「降誕会」の上堂の末にこの真言を唱えて上堂を終えている。（『宏智語録』卷四・T48・44b）施食とは直接無関係な陀羅尼であり、五如来の称名とセツトであろうと思われる。

(3) 鳴尺二「尺」は音声を発するのための仏具の一種。主に授戒会に用いることから「戒尺」とも言う。無著道忠云わく、「向つの小木。一は仰上向一は俯下向にして、仰上向の者は下下向に在りて、稍やや大なり。上なる者を把とつて下なる者に擬なして、撃たたちて之を鳴ならす。受戒に専ら之を用う。故に戒尺の称を得たり。余、古徳の受戒の具を得るに、其の戒尺の、下に在る者は、長さ七寸六分、厚さ六分、闊ひろさ一寸一分余り、下面の四辺に縷いと面めん有り。上に在る者は、長さ七寸四分、厚さ五分余り、闊ひろさ一寸、上面の四辺に縷いと面めん有り。上木の正中に豎たてに木鈕きつぽを安やすず。鈕きつぽは長さ二寸五分、高さ七分。鈕きつぽを把とつて之を撃たたつ（向小木。一仰上向一俯下向、仰上向者在あ下、稍やや大。把と上者、擬な下者撃たたちて鳴なす。受戒専用之。故得戒尺之稱。余、得古徳受戒之具。其戒尺在下者、長七寸六分、厚六分、闊一寸一分餘、下面四辺有縷面。在上者、長七寸四分、厚五分餘、闊一寸、上面四辺有縷面。上木正中、豎安木鈕、鈕長二寸五分、高七分。把鈕撃之」。(中文出版社本「禪林象器箋」p.738b-739a)

《8》破地獄偈(施餓鬼会8)

諸仏子等、若人欲了知三世一切仏、應觀法界性一切惟心造。此一偈出華嚴經。昔人对冥官誦之、見地獄相、皆悉破懷。世伝為破地獄偈。蓋言其略也。使広言之、此偈不惟破地獄、至十法界悉皆能破。何則原夫三世無仏、法界何性、依此一心、而皆建立。了知此心、無相無体、非色非空、不有而有、不無而無。以不有故、十法界取婦毫末。以不無故、三世仏隨處出生。所以云、青青翠竹尽真如、鬱鬱黄花皆般若。審如是、則四生六道、全是自心。八難三途、元非佗得。

(校注)(一)元二原本・統藏本ともに「元」に作るが、文意によるに「元」の間違ひであろう。

*

諸もろの仏子等よ、「若し人三世一切の仏を了知せんと欲せば、応に法界↑の性は一切た惟だ心の造りしものと

観ずべし」と。此の一偈は『華嚴經』に出ず。昔人、冥官(3)に対して之を誦し、地獄の相皆な悉く破懐するを見れば、世に伝えて「破地獄の偈」と為す。蓋し其の略を言うなり。使し広く之を言わば、此の偈惟だに地獄を破るのみにあらず、十法界に至るまで悉く皆な能く破す。何となれば則ち原ぬるに夫れ三世に仏無くんば、法界界をか性とせん。此の一心に依りて皆な建立す。此の心を了知せば、相無く体無く、色に非ず空に非ず、有ならずして有、無ならずして無なり。有ならざるを以ての故に、十法界、毫末に収歸し、無ならざるを以ての故に、三世の仏、隨処に出生す。所以に云う、「青青たる翠竹は尽く真如、鬱鬱たる黄花は皆な般若なり」と。審し是くの如ければ、則ち四生六道、全く是れ自心、八難三途、元より佗より得るに非ず。

*

もろもろの仏弟子たちよ、「もし〔過去・現在・未来〕三世の一切の仏を了知りたいならば、法界の本性は一切〔仏の〕惟心で造られたものであると観なくてはならない」と。この一偈は『華嚴經』に出てくる。むかしある人が冥界の役人に向かつてこゝの偈を誦えりと、地獄の相がごとごとく破壊されるのを見たので、「後の」世に「破地獄の偈」として伝えられた。思うに、「これは」その〔内容を〕省略して言つたものだ。もし詳しく言うならば、この偈は地獄を破〔壊〕するだけではなく、十法界に至るまですべて破〔壊〕することができ。なぜかと〔その理由を〕いうならば、「過去・現在・未来の」三世に仏がいなければ、法界は何を本性と〔して成立〕するであろうか。この〔仏の〕一心によつて建立しているのだ。〔この心は〕相もなく〔実〕体もなく、色もなく空つぽでもなく、有るのではないが有り、無いのではないが無い。有るのではないから、十法界は毛先〔ほどの〕こまかいところ〕に収まり、無いのではないから〔過去・現在・未来〕三世の仏はそれぞれの場所に應じて出生るのだ。だから「青々とした翠の竹は尽く〔あるがままに〕真理そのものであり、咲ききそう黄色い花は皆な〔さとり〕の〕般若である」と言うのだ。もしそうであれば、このようにすべての生きものや迷いの世界も、すべて

自らの心〔から生じたもの〕であつて、〔仏法に出会うことが出来ない〕八種類の環境や〔地獄・餓鬼・畜生の〕三途ももとより〔自らの心の〕他^{ほか}からやつてきたのではない。

*

- (1) 法界Ⅱ事物の根源。法の根源。大乘仏教では、この全宇宙の存在を法、すなわち真理のあらわれとみて、これを真如の同義語に使う。そしてこの法界は真理そのものとしてのブツダ、すなわち法身と同義である。また法界性とは法界の本性。〔『中村』p.1249' 同p.1250〕
- (2) 華嚴経Ⅱ八〇卷本『華嚴経』卷一九 (T10・102a～b) に見える。
- (3) 冥官Ⅱ冥土の役人。冥界の官僚。地獄の閻魔庁の役人。〔『中村』p.1309〕
- (4) 十法界Ⅱ十の世界の意。十界に同じ。迷いとさとりの世界を十種に分けたもの。すなわち、地獄界・餓鬼界・畜生界・阿修羅界・人間界・天上界・声聞界・縁覚界・仏界。〔『中村』p.591-592〕
- (5) 一心Ⅱ究極の根底としての心。万有の実体真如をいう。一とは平素絶対の意。心は堅実性を表わす。あらゆる現象の根源にある心。宇宙の事象の基本にある絶対的な真実。〔『中村』p.62〕
- (6) 所以云、青青翠竹尽真如、鬱鬱黄花皆般若Ⅱ『碧巖録』第九七則・本則評唱 (岩波文庫本①・p.235) にそのまま見える。黄花は『新字源』に「菊の別名」(p.530) とある。
- (7) 四生Ⅱ四種類 (胎生・卵生・湿生・化生) のあらゆる生きもの。いのちあるもの。迷いの世界のあらゆる生きもの。またその生きものをその生まれ方の相違によつて四つに分類していう。〔『中村』p.523〕
- (8) 六道Ⅱ衆生が業によつて生死を繰り返す六つの世界。迷いの世界。六趣に同じ。地獄道・餓鬼道・畜生道・修羅道・人間道・天道をいう。〔『中村』p.1457〕
- (9) 八難Ⅱ仏を見ず、仏法を聞くことができない境界が八種あるのをいう。〔『中村』p.1104〕

《9》六道（施餓鬼會9）

良由情存愛見、跡涉勝緣。五戒以之奉持、十善以之修進、報緣會遇、自切利而至四空。是名天道。

心根欲愛、識負聰明、動不離於五常、居不忘乎百行。自三教九流、四民万姓、貧富貴賤、善惡賢愚、但循業輪、以之流伝。是謂人道。

欲愛兼隕、而生勝見、鬪諍不息、狼戾奚忘^(C)。有福天倫、無福鬼趣。是謂修羅道。

如是三類、雖具信根、全該有漏、隨業躋昇、名三善道。

愛見入心、而生貪業、妄求不足、日夕懸情。如是貪業、在內則為渴為飢、在外則為風為焰。是為餓鬼道。欲貪不息、展伝成痴、情想變動、逐業昇沈、鱗甲羽毛、態狀千万。名畜生道。

十習不斷、六交繞纏、劍穿火山、鉄輪湯鑊、倒懸飛墜、執縛勘磨、八寒八熱、以至無間、名地獄道。

如是三類、既罔善因、復滋貪等、虛空有尽、此苦莫窮。名三惡道。

前三善類、後三惡倫、通名六道。如是流転、動經塵劫、或不回心向道、罔有出期。何以知之。古教謂、因業受身、身還造業。從心起境、境復生心。故知、業出身造、境自心生。処処遷流、念念輪転、從生至死、自始至終、如象溺泥、似蟻旋磨。是故吾仏大沙門、於無所見処、興大哀憫、以無作妙力、熱而為香則普熏、散而為花則遍布、然而為灯則俱照、洒而為水則均沾、獻而為果則無不莊嚴、施而為食則皆獲充足、乃至諸法之財、隨其所求而俱獲。是謂七種妙供、一味真慈。於諸仏念念出生、在衆生各具具足。

〔校注〕（一）忘^レ統藏本は「意」に作るが、原本は「忘」に作る。

良^(まこと)に情、愛見を存し、跡、勝緣に涉るに由る。五戒之を以て奉持し、十善^(じゆ)之を以て修進して、報緣^(し)會遇せば、切利^(きり)自り四空^(しよくう)に至る。是れを天道と名づく。

心根欲愛、識、聡明を負い、動きて五常を離れず、居りて百行を忘れずんば、三教九流、四民万姓、貧富賤、善悪賢愚に自り、但だ業輪に循い、之を以て流転す。是れを人道と謂う。

欲愛、瞋を兼ねて勝見を生じ、鬪諍息まず、狼戾奚ぞ忘れんや。福有るは天倫、福無きは鬼趣。是れを修羅道と謂う。

是くの如き三類、信根を具し、全く有漏を該ぬと雖も、業に随い亶く昇らば、三善道と名づく。

愛見、心に入りて貪業を生じ、妄りに求むるも足らず、日夕、情に懸る。是くの如き貪業、内に在りては則ち渴と為り飢と為り。外に在りては則ち風と為り焰と為る。是れを餓鬼道と為す。

欲貪、息まず、展伝して痴と成り、情想變動して業を逐いて昇沈し、鱗甲羽毛、態状千万なるを、畜生道と名づく。

十習、断ぜず、六交繞纏し、劍奔火山、鉄輪湯鑊、倒懸飛墜、執縛勘磨、八寒八熱より以て無間に至るまでを、地獄道と名づく。

是くの如き三類、既に善因罔く、復た貪等を滋さば、虚空尽くること有るも、此の苦は窮まること莫ければ、三惡道と名づく。

前の三善類、後の三惡倫、通じて六道と名づく。是くの如く流転して、動もすれば塵劫を經。或し心を回して道に向かわずんば出期有ること罔し。何を以て之を知るや。古教に謂う、「業に因りて身を受く、身還た業を造り、心に従りて境を起こし、境復た心を生ず」と。故に知る、業は身由り造られ、境は心自り生ずることを。処処遷流し、念念輪転して、生従り死に至り、始め自り終わりに至ること、象の泥に溺るるが如く、蟻の磨を旋るに似たり。是の故に吾が仏大沙門、無所見の処に於いて大哀憫を興こし、無作の妙力を以て熱して香と為さば則ち普く熏じ、散じて花と為さば則ち遍く布き、然して灯と為さば則ち俱に照らし、洒いで水と為さば則

ち均しく沾らし、献じて果と為さば則ち莊嚴せざるなく、施して食と為さば則ち皆な充足を獲、乃至諸もろの法財、其の求むるに所に随つて俱に獲。是れを七種の妙供、一味の真慈と謂う。諸仏に於いて念念出生し、衆生在りて各各具足す。

*

まことに情に愛見をいだいてはいるものの、跡が勝れた縁に関わり、「たとえば不殺生・不偷盜・不邪婬・不妄語・不飲酒の」五戒を奉持ち、十善(戒)を修進することによつて、「その生まれ変わる」報縁に會遇つたならば、「欲界の」忉利(天)から(無色界の)四空天に至る(天上世界に生まれることになる)。これを天道と呼ぶ。

心根に欲愛があるけれども、「感覺器官である六」識が聡明(すずめ)れていて、行動しても(人間の守るべき道である)五常(仁・義・礼・智・信)をはずれることがなく、じつとしていても多くの(善い)行いを忘れることがないならば、「(儒仏道の)三教や(中国古来の)いろいろな学派(に出会つたり)」、「(土農工商の)四つの階級やいろいろな姓(に属したり)」、貧乏になつたり金持ちになつたり、偉くなつたり賤しくなつたり、善人になつたり悪人になつたり、賢くなつたり愚かになつたり、ただその業による(輪廻の)輪に従つて流転することになる。これを人道という。

欲愛があるだけでなく瞋(いか)り(のこころ)を兼ね(いだき)勝見(せいけん)を起こして、争いがおさまることがない。狼戾(わんげ)けた(こころ)がどうしてなくなろうか。功德があるものは天上世界、功德がないものは餓鬼の世界(に生まれる)。これを修羅道という。

これら三種類は(仏法に対する)信という基礎を具えてはいるが、まぎれもなく有漏(ぼんろう)も備えており、業に従つてひとまず(上方の世界に)昇るから、三善道と呼ばれる。

愛見が心に入つて、貪りという業を生みだし、求め回つて飽き足りることがなく、一日中、「その不満が」情に懸かつてしまう。このような貪りの業が「一身の」内であれば渴きとなり、飢えとなり、外にあれば、「身を切り裂く」風となり「身を焼く」焰となる。これが餓鬼道である。

欲や貪りがやむことなく、めぐりめぐつて愚痴「の状態」となつてしまうと、情想が変動し、業にしたがつて昇沈することになる。魚や亀、鳥や獸と「その」状態は千万である。「これを」畜生道と呼ぶ。

十「悪の行いの」習「氣」が断ち切れず、六「識」の働きが「交」してまわりついて、剣が立つた落とし穴や「身を焼く」火の山、「ひき殺す」鉄の車輪や茹でる釜、逆さ吊りにして「高所から」突き落としたり、縛り付けて「その罪を」あばきだしたり、八寒地獄や八熱地獄から無間地獄に至るまでを、地獄道と呼ぶ。

これらの三種類は、善い因縁がない上に、さらに貪り等「の罪」を増やしているから、虚空がなくなることがあつても、この苦しみはなくなることがない。「だからこの三種を」三悪道と呼ぶのだ。

前の三つの善い仲間と、後の三つの悪い仲間を、合わせて六道と呼ぶ。この様に流転しつづけ、ともすれば塵劫を経過する「ことになる」。もし心を改めて「仏」道に向かわなければ、脱出できる時期はない。どうしてそれが分かるかといえ、古い教えに、「業によつて「我が」身を受け、「その」身がまた業を造る。心によつて「心の対象である」境が起こり、「その」境がまた心を生みだす」と言っている。だから、業は「我が」身によつて造られ、境は「我が」心から生みだされることが分かる。「そして六道の」処々に遷り流れ、念々に輪廻して、象が泥に溺れ、蟻が磨「の縁をぐるぐる」旋るように「抜け出すことが出来ず」、生まれては死に、始まつては終わるのだ。そこで吾が仏大沙門は、所見が無い処で大いなる哀憫を興し、作為のない妙なる力で、熱いて香とするときには「世界中に」普く香りを行きわたらせ、散いて花とするときには「世界中に」遍く布きつめ、燃やして燈とするときには「世界中を」ともに照らし、洒いで水とするときには「世界中を」均しく沾し、献じて果物とするとき

には〔世界中〕莊嚴かざらないところはなく、施して食べ物とするときには〔世界中〕誰でも腹一杯になることができ、さらには諸もろの法財おしえも、その求めに随って、すべて手に入る。これを七種の妙なるお供え、一味なる眞の慈悲と言ふのだ。〔この一味なる眞の慈悲は〕諸仏においては念々生みだされているし、〔この七種の妙なるお供えは〕衆生において各々具足そなわっているのだ。

*

(1) 十善じゅうぜん 十善成。世俗の人の守るべき十の戒め。十善業道を行ずることをもって戒となす立場。不殺生・不偷盜・不邪淫・不妄語・不綺語・不惡口・不兩舌・不貪欲・不瞋恚・不邪見の十。〔中村』p.655〕

(2) 報縁ほうえん 果報の因縁。一期の寿命をいう。〔中村』p.1241〕

(3) 初利しゆり 初利天。三十三天ともいふ。欲界である六欲天の下から二番目に相当する。須弥山の頂上にあり、中央に帝釈天、頂きの四方に八人ずつの天人がいて、計三十三天となる。

(4) 四空しやくう 無色界の四天のこと。下から空無辺処、識無辺処、無所有処、非想非非想処の四つがある。天上世界の最上位にある。

(5) 三教九流さんけうくじゅう 九流は『漢書』芸文志に見える九つの学派。儒家・道家・陰陽家・法家・名家・墨家・縱横家・雜家・農家を指す。

(6) 古教道…『宗鏡録』卷九九 (T48・952b) に見える。

《10》懺悔ざんげ (施餓鬼会10)

以諸仏子、深纏業累、鮮具正因、由神鏡之光昏於積塵、若精金之体雜於巨鉢。我今首為諸仏子、懺滌罪障、然

後帰依三宝、乃与受五支淨戒、具四弘誓願、發菩提心、如上仏事、当処周円、各各現優曇花於生寂滅之場。此何凡彼何聖。熟菩提果於向昇沈之地、今非悟昔非迷。不惟六趣夢魂消、將見四真名字飯。我今依憑聖教、代諸仏子懺悔罪惡。普請大衆同声称和。

往昔所造諸惡業、皆由無始貪瞋痴、從身口意之所生、一切我今皆懺悔 三唱

我今有滅罪障真言諸仏子至心諦聽

唵薩嚩跋波尾莎普 二合 吒捺賀 引 曩嚩曰囉 二合 野 引 娑嚩 二合 賀 引

〔校注〕(一) 臣ニ統藏本は「巨」に作る。

*

諸仏子、深く業累まよひに纏まとるるを以て、正因せいを具そなへること鮮すくなし。由なお神鏡の光の、積塵くぢに昏くらまざるがごとく、精金の体の、巨鉢こぼに雜まじるが若し。我今いま首はじめに諸仏子の為に罪障を懺さん滌てきし、然る後に三宝に帰依して、乃すなち与なに五支淨戒を受け、四弘誓願を具し、菩提道心を發はさしめん。如上の仏事当処に周円し、各各、優曇花を、寂滅を生ずるの場に現あらわれば、此れ何ぞ凡ならんや、彼れ何ぞ聖ならんや。菩提の果を昇沈に向かうの地に熟うさしむれば、今悟るに非ず、昔迷うに非ず。惟だに六趣の夢魂消ゆるのみにあらず、將に四真の名字の仮なるを見んとす。我今、聖教に依憑し、諸仏子に代わりて罪惡を懺悔し、普く大衆を請じて同声に称和せん。

往昔造る所の諸もろの惡業は、皆な無始の貪瞋痴に由り、身口意の生ずる所に従う。一切我今皆な懺悔 三唱

我に今、罪障を滅する真言有り、諸仏子よ至心に諦聽せよ。

唵薩嚩跋波尾莎普 二合 吒捺賀 引 曩嚩曰囉 二合 野 引 娑嚩 二合 賀 引

*

仏弟子たちは深く業の累むすいに纏まとい付つかれてゐるから、「悟りへの」正しい因縁を具もへることがないのである。「それは」ちようど神々しい鏡の光が積もつた塵にくらまされるようなものであり、精鍊しやうれんされた金の本体が巨大な鉞石の中に混じり込んでゐるようなものである。私は今、最初に仏弟子たちのために罪障つみざらを懺ざん滌げし、その後で「お前たちが」三宝に帰依し、五つの淨らかな戒を受け、四弘誓願を具もへて、菩提ぼだいの道をもとめる心を発おこすようにしよう。以上のような仏事は当処こゝに周円そうつている。各々が、「仏が出現する時に咲くと言われている」優曇花うたんげを寂滅じやくめつを生みだす（この）場に現出するならば、こちらは凡夫であちらは聖者ということがあろうか。菩提ぼだいという果を昇あがり沈しずに向かつてゐる（この）地に熟させるならば、今悟るわけでもないし菩提ぼだい迷まつていたわけでもないことになる。ただ六趣（を輪廻する実体のない）夢のような魂が消えさるだけでなく、「積尊じやくそんが説かれた」四（諦じつという）真（理）も仮のものであることが分かるであろう。私は今、聖なる教えに依つて、仏弟子おんまたちに代わつて罪惡を懺悔ざんげしよう。普あまく大衆たいしゆに声を合あわせて唱和ねがするよう願ねがひしたい。

往昔むかし造つくつた諸々の惡業は、皆みな無始むじの貪おん（むさぼり）・瞋おん（いかり）・痴おん（おろかさ）によつて、身み（からだ）・口くち（ち）・意い（こころ）より生じたものである。（その）一切いっけつを私は今皆みな懺悔ざんげします。三回唱なえる。

私わたしに今、罪障つみざらを滅めつぼす真言まごんがある。仏弟子おんまたち、至心ししんでよく聴ききなさい。

唵おん薩さつ唵おん跋ばつ波は尾えい莎しゃ普ぷ二につの字じを合あわせて、音おんとして読よむ

吒た捺な賀が引ひす 眞ま嚩わ囉ら二につの字じを合あわせて、音おんとして読よむ

野の引ひす

*

（一）往昔所造諸惡業、皆由無始貪瞋痴、從身口意之所生、一切我今皆懺悔 宗門で用いられている所謂「懺悔文」であり、一般的に四〇〇巻本『華嚴經』卷四〇（T10・847a）が典拠とされ、『勅修百丈清規』卷五（T48・1137c）などに引かれてゐるが、出だしの部分は全て「我昔…」であり「往昔…」ではない。「往昔…」となつた資料としては、清代

に編纂された『百丈清規証義記』があるが、第四句目も「一切罪根皆懺悔」(巻五・Z111・345d、巻七上・383d、巻八・422b)と少し異なっている。

(2) 唵薩嚩跛波尾沙普_二合吒捺賀引曩嚩日囉_二合野引娑嚩_二合引賀引_二『大毘盧遮那經広大儀軌』(T18, No. 851)、『大日經持誦次第儀軌』(T18, No. 860)等にみえる「出罪方便真言」、および『受菩提心戒儀』(T18, No. 915)、『大日如来劍印』(T18, No. 0864A)等に見える「懺悔滅罪真言」に類似する真言。自らの罪業を消滅せしめるために用いるものである。經典の表記のまま写すなら「Om sarva pāpa visphoia tahāna vajrayā svāhā」となるが、tahāna は dahana または dahana vajraya は vajraya と読むことで、次のような意味に解釈することができる。「オーン、すべての罪よ、金剛智によつて碎けよ、燃えよ、スヴァーハー！」

《11》 帰依三宝(施餓鬼会11、盂蘭盆会12)

汝諸仏子、懺悔已淨、今当帰依三宝。夫三宝者、多種不同。今但略説。金相玉毫、坐宝蓮華、名爲仏宝。琅函貝葉、滿毘盧藏、是謂法宝。方袍円頂、不染世塵、名爲僧宝。此係有相住持三宝也。須知、一念之間、具足三宝。一念理体、離諸名相、是謂仏宝。従体顕用、法界森然、是名法宝。体用交徹、理事不二、標名僧宝。今則先帰依住持三宝、然後頓明自己一体三宝。是謂自浅而深者也。我今代汝称揚。普請同声唱和。

帰依仏無上尊。帰依法離欲尊。帰依僧衆中尊。

帰依仏不墮地獄。帰依法不墮餓鬼。帰依僧不墮旁生。

帰依仏竟。帰依法竟。帰依僧竟。

如来至真等正覺、是我大師。汝今帰依、誓不帰依邪魔外道。惟願三宝慈憫故。

如是三唱。

今有帰依三宝真言。至心諦聴。

唵歩引 欠

汝ら諸もろの仏子よ、懺悔して已に淨くなれば、今当に三宝に帰依すべし。夫れ三宝とは多種ありて同じからざるも、今但だ略して説かん。金相・玉毫ありて、宝蓮華に坐するものを、名づけて仏宝と為す。琅函貝葉の毘盧藏に満つるもの、是れを法宝と謂う。方袍円頂にして、世塵に染まらざるものを、名づけて僧宝と為す。此れは有相の住持三宝に係るなり。須く知るべし、一念の間に三宝を具足することを。一念の理体は、諸もろの名相を離る、是れを仏宝と謂う。体従り用を顯わし、法界森然たる、是れを法宝と名づく。体用交徹して、理事不二なるを、標して僧宝と名づく。今は則ち先ず住持三宝に帰依して、然る後に頓に自己の一体三宝を明らかにせん。是れ「浅き自りして深くす」と謂う者なり。我今、汝に代わりて称揚せん。普く同声に唱和せんことを請う。

仏、無上尊に帰依す。法、離欲尊に帰依す。僧、衆中尊に帰依す。

仏に帰依せば地獄に墮ちず。法に帰依せば餓鬼に墮ちず。僧に帰依せば旁生に墮ちず。

仏に帰依し竟わる。法に帰依し竟わる。僧に帰依し竟わる。

如来、至真等正覚は、是れ我が大師なり。汝今、帰依して、誓つて邪魔外道に帰依せざれ。惟だ三宝の慈憫を願うが故に。是くの如く三唱す。

今、「帰依三宝真言」有り。至心に諦聴せよ。

唵歩引 欠

*

お前たち、もろもろの仏弟子たちよ、懺悔してすでに淨らかとなったならば、「今度は」三宝に帰依しなくてはならない。そもそも三宝には異なった多くの分類があるが、今は簡単に説明しよう。黄金色の姿で「眉間に」白い毛があり、宝（石で飾られた）蓮華（の台坐）に座っているものを、仏宝と名づける。経蔵（の中）に一杯になつて（保管されて）いる琅（の）函（の中の）貝葉、これを法宝という。袈裟（を付け）（剃髪して）頂を丸くし、世塵に染まらない者を、僧宝と名づける。これらは形があつて（眼に見ることの出来るものとしての）「住持三宝」に係わるものだ。「しかし更に、今この」一瞬の間に三宝を（自らが）具足していることを知っておかねばならない。一瞬一瞬に真理の本体が、様々な言葉や姿かたちから離れて（存在して）いる、これを仏宝という。「真理の」体より用が顕われ、法界がびつしりと立ち並んでいる、これを法宝という。体と用とが互いに通徹し、「普遍的な真理としての」理と（因縁から生じた現象としての）事とが不二である、「これを」標榜して僧宝という。今、先ず住持三宝に帰依し、その後、自己が一体三宝であることが頓に明る。これが「浅いところより（始めて）、深くしていく」ということなのだ。私が今お前たちに代わつて称揚しよう。どうか声を揃えて同じように唱和しなさい。

この上なく尊い存在である仏に帰依します。欲を超越した尊い存在である法に帰依します。（仏法を實踐する）衆生のなかの尊い存在である僧に帰依します。

仏に帰依すれば地獄（道）に墮ちることはありません。法に帰依すれば餓鬼（道）に墮ちることはありません。僧に帰依すれば畜生（道）に墮ちることはありません。

仏にしつかりと帰依しました。法にしつかりと帰依しました。僧にしつかりと帰依しました。等正覚に完全に到達した如来、これが我々の大いなる師です。汝は今帰依して、誓つて邪魔や外道に帰依してはなりません。ひたすら三宝からの慈憫を願うからです。このように三回唱える。

今「帰依三宝真言」〔という呪文〕がある。心を至こゝて、よく聴きなさい。

庵歩オンブのほカク引ず。欠

*

(1) 金相・玉毫ニともに、仏や転輪聖王がもつ三十二種の身体的特徴(三十二相)の一つ。ただし、その内容については經典によりかなりの異説がある。「金相」とは、皮膚が細滑で黄金のようであること。身金色相・身金色相に同じ。「玉毫」とは、眉間に白い柔らかな毛があつて右旋していること。白毛相・白毫相に同じ。『中村』(p.472)「三十二相」項参照。

(2) 貝葉ニ貝多羅葉の略。多羅樹の葉。インドでは經文を書写するのに用いられた。転じて、經典のことを指す。

(3) 毘盧藏ニ經典を収め祀る建物。いわゆる「経蔵」のことであるが、辞書類には未見。

(4) 住持三宝ニ禪家で用いられる三宝の三分類(現前三宝・住持三宝・一体三宝)の一つ。仏教が仏滅後の時代に住持存続する場合の三宝を指す。具体的には①仏像②経巻③剃髮染衣の僧。(『望月』p.1648・『禅学』p.408等参照)

(5) 理事不二ニ本体と現象が一体不可分であること。「理」は因縁の造作を離れた普遍的な真理をさす。「事」は因縁によつて生じた差別的現象のこと。

(6) 一体三宝ニ三宝(仏法僧)を①無上の真理②その清浄の徳③和合の徳、として捉えた分類の一つ。また、三宝が真如を具えている点から、これを別個のものとせず一体のものと思はし、しかもこの真如は我々の心にも具備されているから、心と一体なものであることも示す。(『中村』p.487・『禅学』p.408等参照)

(7) 自浅而深ニ宋・呂祖謙『左氏伝説』卷二〇に「自軽而重、自浅而深」とあり、似た表現として朱子『論語精義』卷一〇上に「自小以至大、自浅以至深」とある。

(8) 旁生ニ畜生道のこと。(『禅学』p.1134参照)

(9) 庵歩欠Ⅱ「欠」字は以降の欠落を意味する衍字のおそれもあるが、還梵すれば「On bhūḥ kham」となる。「bhūḥ」大地を意味する名詞「bhū」の中性、単数、呼格。「kham」は種子か。「オーン、大地よ！カム！」と訳しうる。不空『菩提心戒儀』(T18・940c)に同じく「帰依三宝真言」との名称で載せられるが詳細は不明。

《12》受戒（施餓鬼会12、孟蘭盆会13）

汝諸仏子、既爾稱仏為師、当稟受如来淨戒。我今依教、為汝宣説五支淨戒之相。

夫不殺生是五戒相。原夫殺生、以瞋為本。瞋業既盛、殺害滋多、命命相負、展轉酬償、自殺教人殺。殺心不除、輪廻不斷。是故尽形令不殺生。

不偷盜是五戒相。原夫偷盜、以貪業為本。貪業未盡、偷心不忘、機閑暗啓、恐怖橫生。過去未來、互相酬報、自偷教人偷。偷心不息、塵不可離。是故尽形令不偷盜。

不婬欲是五戒相。原夫婬業、根於痴毒。愛水溺心、化為欲火。受形稟命、莫不由斯。自婬教人婬。婬心不除、塵何有尽。是故尽形令不婬欲。

不妄語是五戒相。原夫妄語、已如上殺盜婬業、交相隱覆、使不自知、虛妄成就。妄既成、復資貪等、自妄教人妄。纏縛生死、安有出期。是故尽形令不妄語。

不飲酒是五戒相。原夫飲酒、能昏正念、能亂正心。昏亂無時、邪謬交作。如上四戒、因之而生。寧飲毒藥、勿貪酒味、自飲教人飲。尽言酒過、積劫莫窮。是故尽形令不飲酒。

名教有言、五戒不持、人天路絶。然五戒之外、復有十無尽戒・四十八輕垢戒・二百五十種大戒、及三聚具足淨戒、無有窮極。如人入海、漸入漸深。汝但信心不退、則諸戒自然入心者矣。

汝ら諸もろの仏子よ、既爾すてに仏を称して師と為さば、当に如来の淨戒を稟受すべし。我今、教に依りて、汝の為に五支淨戒の相を宣說せん。

夫れ不殺生ふせうじやうは是れ五戒の相なり。原ぬるに夫れ殺生は、瞋を以て本と為す。瞋業既に盛んなれば、殺害いよく滋いいよ多し、命命相めいめい負おひきて、展轉酬償たんとくし、自ら殺し人をして殺さしむ。殺心除かざれば、輪廻を断ぜず。是の故に形を尽くすまで殺生せざらしむ。

不偷盜ふちゆうたうは是れ五戒の相なり。原ぬるに夫れ偷盜は、貪業を以て本と為す。貪業未だ尽きざれば、偷心忘れず、機関暗きかんあんに啓ひらき、恐怖横おそに生ず。過去未来、互相たがひに酬報たがひして、自ら偷み人をして偷ましむ。偷心息まずんば、塵離る可からず。是の故に形を尽くすまで偷盜せざらしむ。

不婬欲ふいんよくは是れ五戒の相なり。原ぬるに夫れ婬業は、痴毒に根ざす。愛水、心を溺らせ、化して欲火と為る。形を受け命を稟くるは、斯れに由らざるは莫く、自ら婬し人をして婬せしむ。婬心除かざれば、塵何ぞ尽くること有らんや。是の故に形を尽くすまで婬欲せざらしむ。

不妄語ふもうごは是れ五戒の相なり。原ぬるに夫れ妄語は、已に上の殺・盜・婬の業の如きを、交こも相あい隠覆かくふして、自ら虚妄の成就するを知らざらしむ。妄既に成ずれば、復た貪等を資たくけ、自ら妄し人をして妄ならしむ。生死に纏縛てんばくせられ、安くんぞ出期しゅつご有らんや。是の故に形を尽くすまで妄語せざらしむ。

不飲酒ふおんじゆは是れ五戒の相なり。原ぬるに夫れ飲酒は、能く正念を昏くらし、能く正心を乱す。昏乱するに時無く、邪謬じまう交こも作おる。如上の四戒、之に因よりて生ず。寧ろ毒藥を飲むも、酒味を貪むほり、自ら飲み人をして飲ましむること勿かれ。酒の過を尽く言わば、積劫むじにも窮むまること莫し。是の故に形を尽くすまで飲酒せざらしむ。名教に言える有り、「五戒持たざれば、人天の路絶つす」と。然も五戒の外、復た十無尽戒・四十八輕垢戒しやうやくか・

二百五十種大戒、及び三聚具足淨戒有りて、窮極有ること無し。人の海に入るが如く、漸く入れれば漸く深し。汝但し信心して不退なれば、則ち諸もろの戒は自然に心に入る者なり。

*

お前たち、もろもろの仏弟子たちよ、すでに仏を師匠と称するからには、如来の淨戒を裏受けなくてはならない。私が今〔仏陀の〕教えによつて、お前たちの為に五つの支〔から構成される〕淨戒の相を説き聞かせよう。さて、不殺生は五戒の〔一つの〕相である。そもそも殺生は、〔三毒の中の〕瞋を根本としている。瞋という業が旺盛になると、〔他の生命を〕殺害することがますます多くなる。命と命どうしが互いにそむきあい、展転つて償いとしての果報を受け、自ら殺し、他人に殺させることになる。〔この〕殺〔生〕の心を取り除かなければ、輪廻は断ち切れない。だから命が尽きるまで殺生をさせないようにするのだ。

不偷盜は五戒の〔一つの〕相である。そもそも偷盜とは、〔三毒の中の〕貪りの行いを根本としている。貪りの行いがまだ尽きていなければ、偷〔盜〕の心はなくなるはず、〔偷盜という〕機関が暗と啓し、〔自分も偷盜されるのではないかという〕恐怖が横に生じる。過去から未来へと、互相に酬報をし、自ら偷み、他人に偷みをさせることになる。偷〔盜〕の心が息まなければ、塵から逃れることなど出来ない。だから命が尽きるまで偷盜させないようにするのだ。

不婬欲は五戒の〔一つの〕相である。そもそも婬業は〔三毒の中の〕痴毒を根本としている。愛〔欲の〕水に心が濁れば、〔その水は〕欲望の火へと變化する。〔自分が虚妄な〕身体を受け命を棄けたのは、この〔婬欲〕によらないことはないの〔は分かつているの〕に、自ら性行為をなし、他人に性行為をさせることになる。婬〔欲〕の心を除かないで、どうして塵を無くすことが出来ようか。だから命が尽きるまで婬欲〔を起こ〕させないようにするのだ。

不妄語は五戒の「一つの」相である。そもそも妄語は、既に前述した殺・盜・姪の業を、相互に隠し覆いあつており、虚妄が成就してしまうのに自分で気付かないようにさせている。妄が成り立つてしまえば、さらに貪りなど「の三毒」を資けることになり、自ら妄をつき、他人に妄をつかせることになる。「その結果として」生死に纏縛れてしまい、どうして「そこから」出「られ」る期が有ろうか。だから命が尽きるまで妄語させないようにするのだ。

不飲酒は五戒の「一つの」相である。そもそも飲酒は、正しい思考を昏まし、正しい心を乱れさせる。昏乱は時を選ばず、邪な謬が次々に発生する。前述の四つの戒「が戒めている事柄」も、これ（飲酒）を原因として生じるのだ。酒味を貪り、自分で飲み他人に飲ませるくらいなら、毒薬を飲んだ方がまだ。酒の欠点を言い尽くすならば、積劫に終わりなどない。だから命が尽きるまで飲酒させないようにするのだ。

名教に言っている、「五戒を持たなければ、六道の中の」人道・天道への「生まれ変わりの」路が途絶える」と。しかも「上述の」五戒のほかにも、「教団追放に至る重罪を規定した」十無尽戒・「それに付随する軽微な罪を示した」四十八輕垢戒・「比丘が守るべき」二百五十種大戒、及び「大乘戒と小乘戒を総合した」三聚具足淨戒「など」があつて、窮極などない。人が海に入るように、入れば入るほど深くなつてゆく。お前たち、もし信心して退くことが無ければ、諸もろの戒は自然に心に入つてゆくものだ。

*

(一) 五戒不持、人天路絶 智徹述『禪宗決疑集』(148・1014c)に「經云、五戒不持、人天路絶。五戒者、乃諸戒之首、万善之初」とある。經論で同句は未見。

(二) 十無盡戒 十重戒・十重禁戒ともいう。『梵網經』などに説かれる、大乘仏教者として守らなければならぬ十個条の重要な戒法。大乘教団からの追放罪を構成する重罪。具体的には不殺生・不偷盜・不邪淫・不妄語・不酤酒・不説過・

不自讚毀他・不慳法財・不順悲・不謗三宝の十戒。(『中村』p.591「十戒」項・『禪学』p.495参照)

(3) 四十八輕垢戒 、『梵網經』の説く大乘戒のうち、十重戒に対して、比較的特殊な輕微の罪をいませめた戒を四十八数えたものを指す。(『中村』p.521・『望月』p.1811・p.4712等参照)

(4) 二百五十種大戒 、『二百五十戒』のこと。小乗の戒律で、特に比丘の守るべき戒を具足戒・大戒というが、その数が二百五十あるものでこのようにいう。律書によって少しずつ数は違い、二百五十は基本数である。(『中村』p.1049・『禅学』p.985等参照)

(5) 三聚具足淨戒 、『三聚淨戒』と具足戒のこと。「三聚淨戒」とは菩薩戒の性格を三種に分類したもの。大別して二種類がある。①『梵網經』等に説かれる大乘独自の説で、十重戒と四十八輕戒を受持して一切の悪を防ぐ「損善法戒」、進んで善を行う「損善法戒」、一切の衆生を教化し利益を施すように努める「損衆生戒」。②『瑜伽論』等に説かれる小乗戒を加味した通三乗の説で、小乗戒を繼承する「律儀戒」、一切の善をことごとく修する「損善法戒」、衆生にあまねく利益を施す「饒益有情戒」。「具足戒」は前説の通りの小乗戒をさすが、(こ)では膨大にある大乘小乗一切の戒律の喩えを総合して、このように表現している。(『望月』p.1570・『中村』p.471・『禅学』p.397等参照)

《13》四弘誓願(施餓鬼会13、盂蘭盆会14)

汝諸仏子、既得具受如来淨戒。当發菩提道心具四弘誓願。原夫四弘誓願即菩提道心之用、菩提道心乃四弘誓願之体。三世諸仏無辺開士、未有不具是願而得菩提道心不退転者。我為唱言、当随唱而和。

衆生無辺誓願度、煩惱無尽誓願断、法門無量誓願学、仏道無上誓願成。如是三唱。

〔校注〕(一)無上 、『原本』、続藏本は共に「無成」に作る。但し『天台四教儀』(T46・777b)・『四明尊者教行録』

卷一(146・862a)、『五燈全元』卷一九「白雲守端禪師」条(2138・3636)など、教と禪を問わず一般に『四弘誓願』の第四句は「無上」に作っており、「無成」という用例はここだけである。よって誤字と見て改正した。

*

汝ら諸もろの仏子よ、既に具に如来の淨戒を受くることを得。当に菩提道心(1)を發おこし、四弘誓願(2)を具うべし。原ぬるに夫れ四弘誓願は即ち菩提道心の用なり。菩提道心は乃ち四弘誓願の体なり。三世の諸仏、無辺の開土(3)に、未だ是の願いを具えずして、菩提道心の不退転を得る者有らず。我、為に唱言す。当に随い唱えて和すべし。

衆生は無辺なるも度せんことを誓願す、煩惱は無尽なるも断ぜんことを誓願す、法門は無量なるも学ばんことを誓願す、仏道は無上なるも成ぜんことを誓願す。是くの如く三唱す。

*

お前たち、もろもろの仏弟子たちよ、すでに如来の清淨な戒をすつかり受けることができた。(次に今度は、)菩提(1)「を求める」道心(2)を起こして、四つの広大な誓願を具えなければならぬ。そもそも四つの広大な誓願は、菩提(1)「を求める」道心(2)の用であり、菩提(1)「を求める」道心(2)は、四つの広大な誓願の体(3)である。(過去・現在・未来の)三世におられる無数の仏たち、「そして」あらゆる菩薩たちでさえ、この願いを具えないで、不退転の位(4)(決して退くことがない高い境地)を得たものはいない。私はお前たちのために(四つの広大な誓願を)唱えよう。(私に)随つて唱和しなさい。

衆生は無辺(1)くいますが度う(2)ことを誓願(3)います、煩惱は無尽(4)くありますが断つ(5)ことを誓願(6)います、(仏の)法門は無量(7)くありますが学ぶ(8)ことを誓願(9)います、仏道はこの上ないものですが成就(10)することを誓願(11)います。

このように三唱する。

*

(1) 菩提道心 Ⅱ 「菩提道（菩提は梵語、道は意訳）+心」と「菩提十道心」の二通りの分け方が可能だが、何れも菩提 Ⅱ 悟りをもとめる心ということ。〔『広説』下 p528・p1242〕

(2) 四弘誓願 Ⅱ 菩薩が起こす四つの誓願。四つの広大な誓い。あらゆる生きものを救いたいという誓願。すなわち、(1)衆生無辺誓願度。一切の生きとし生けるものすべてを、さとの彼岸に渡そうと誓う、(2)煩惱無量誓願断。一切の煩惱を断とうと誓う、(3)法門無尽誓願学（または知）。仏の教えすべてを学び知ろうと誓う、(4)仏道無上誓願成（または証）。この上ないさとりに至ろうと誓う、四つの大決心。菩薩の誓いを四つに整理した最も代表的なもので、総願と称する。『心地観経』にこの原形が認められるが、上記のような形は智顛にいたってできたと言われる。〔中村』p.511〕

(3) 開士 Ⅱ ①梵語 bodhisattva の漢訳。原語は菩提薩埵と音写され、その略。正道を開き、衆生を開導する士夫の意で仏・菩薩、とくに菩薩のこと。また、大乘の修行者をさす。②高僧の尊称。〔『禪学』p138・『広説』p182〕

(4) 不退転 Ⅱ 退くことのない位。仏道修行の過程で、すでに得た功德を決して失うことがないこと。またその境地。いったん達した位からあととどりしないこと。あとずさりしないこと。また十信の菩薩が障難にあわず、初住不退に進むこと。〔『広説』p.1448〕

《14》発菩提心（施餓鬼会14、孟蘭盆会15）

諸仏子誓願既弘。苟不発菩提心、變成虚設。夫菩提心者過去諸仏已発、現在諸仏今発、未来諸仏当発。蓋菩提心即生仏祖之胎孕、登仏祖之梯級、度仏祖之舟航、出仏祖之門戸。

汝諸仏子、不発菩提心無以出愛河、無以脱苦縛、無以清熱惱、無以証仏乘。当知、菩提心体、離見聞相、離言

説相、離思惟相、廻至離一切諸相。

汝諸仏子、欲証掘菩提心、當觀、四大無我、三界無法、八識無主、六趣無人。如是觀察、迷是自迷、悟亦自悟、樂是自樂、苦亦自苦。故華嚴云、知一切法、即心自性、成就慧身、不由佗悟。如斯顯示、觀體現前。只貴當人全機領荷。所以道、万法是心光、諸緣皆性曉、本無迷悟人、只要今日了。乃彌指三下。

諸仏子、直下來也。菩提心光明、徧在眼根、菩提心音声、全歸耳處。於三善道、不為樂所迷、於三惡道、不為苦所執。惟心仏亦爾、惟仏衆生然。心仏及衆生、是三無差別。汝諸仏子、從今已往、以菩提心為家舍、安住自由、以菩提心為園林、遊行無礙。以菩提心為牀座、宴處逍遙、以菩提心為所師、三昧成就。塵塵入毘盧性海、處處會善知識門。可謂、不移跬步、直屆覺城、不隔一塵、全歸宝所。我今有發菩提心真言、至心諦聽。

唵胃地啻多母怛波二合那野引弥

〔校注〕(一)二合||原本、統藏本は共に「二今」に作るが、明らかに陀羅尼の補注の用語として使われる「二合」の誤りであるので改正した。

諸もろの仏子よ、誓願既に弘きも、苟し菩提心を発こさずんば、寢に虚設と成らん。夫れ菩提心と言うは、過去の諸仏已に発こし、現在の諸仏今発こし、未來の諸仏當に発こさんとするものなり。蓋し菩提心は即ち仏祖を生ずるの胎孕、仏祖に登るの梯級、仏祖に度るの舟航、仏祖を出すの門戸なり。

汝ら諸もろの仏子よ、菩提心を発こさざれば、以て愛河を出ること無く、以て苦縛を脱すること無く、以て熱惱を清むること無く、以て仏乗を証すること無し。當に知るべし、菩提心の体は見聞の相を離れ、言説の相を離れ、思惟の相を離れ、廻り至つて一切の諸相を離るることを。

汝ら諸もろの仏子よ、此の菩提心を証せんと欲せば、當に觀ずべし、四大に我なく、三界に法なく、八識に

主なく、六趣に人なし、と。是くの如く觀察せば、迷うは是れ自ら迷い、悟るは亦た自ら悟り、樂しむは是れ自ら樂しみ、苦しむは亦た自ら苦しむなり。故に『華嚴』に云う、「一切の法は即心自性なることを知らば、慧身を成就し、佗に由りて悟らず」と。斯くの如く顯示し、觀体现前せしむ。只だ、当人の全機領荷せんことを貴ぶのみ。所以に道う、「万法は是れ心の光なり。諸縁は皆な性の暁かなるなり。本より迷悟の人なし。只だ今日了ぜんことを要するのみ」と。乃ち彈指すること三下す。

諸もろの仏子よ、直下に來たれ。菩提心の光明は徧く眼根に在り、菩提心の音声は全て耳處に歸す。三善道に於いては樂の迷わす所と為らず、三惡道に於いては苦の執する所と為らず。惟だ心なる仏も亦た爾り、惟だ仏なる衆生も然り。心と仏と及び衆生と、是の三つに差別無し。汝ら諸もろの仏子よ、今より已往、菩提心を以て家舎となさば安住自由ならん。菩提心を以て園林となさば遊行無礙ならん。菩提心を以て牀座となさば宴処逍遙せん。菩提心を以て所師となさば三昧成就せん。塵々、毘盧の性海に入り、処処、善知識の門に会さん。謂う可し、「跬歩を移さずして、直に覺城に届り、一塵を隔てずして、全く宝所に歸す」と。我に今、「発菩提心真言」有り、諦聽せよ。

唵 胃地呬多 母怛波 二合す 那野 引く 弥

*

もろもろの仏弟子たちよ、誓願は広大なものであつたとしても、もし菩提心を起こさなかつたならば、〔誓願は〕次第に形だけのものになつてしまふだらう。そもそも菩提心というのは、過去の諸仏がすでに起こし、現在の諸仏が今起こし、未來の諸仏がきつと起こそうとするものである。思うに、菩提心というのは、仏祖を生みだす母体であり、仏祖〔の悟り〕に登る梯子であり、仏祖〔の境涯〕に渡る渡し船であり、〔また〕仏祖を輩出する門戸である。

お前たち、もろもろの仏弟子たちよ、菩提心を起こさなければ、愛欲の河から抜け出すことも、苦しみの束縛から脱することも出来ず、熱惱ねつなみをすつきりさせることも、仏道を証あきらかにすることも出来ないのである。菩提心の体はたいは、見聞きできる相あひまでも、言葉で表現できる相あひまでも、思考できる相あひまでもなく、とどのつまり一切すべての〔知覚認識の〕相あひまとはなりえないのである。

お前たち、もろもろの仏弟子たちよ、この菩提心を証あきらかにしたいと思うならば、まず、四大わがみに我われ（とすべきもの）はなく、三界うらめうに法もの（とすべきもの）はなく、知覚認識を支える主しゅ（体）もなく、六趣りんねする人もいないと観てとらなければならぬ。「そして」このように観察する（ことができた）ならば、迷うのも悟るのも自分（が招くこと）だし、楽しむのも苦しむのも自分（の責任）だということが分かるであろう。だから『華嚴經』に、「すべての法ことごとは自性である心に他ならないことが分かれば、〔智〕慧（を具えた仏）身が成就されるのであり、それ（心）以外のものことごとで悟ることはないのだ」と言っているのである。このように〔經典の中に〕包み隠さず示し、丸ごと現前あらわしてくれている。ただ、その人が実力を出し切り〔責任を持って自分で〕領荷にうことが大切なのだ。だから〔龍濟禪師は〕「すべての法ことごとは〔仏〕心の光であり、もろもろの因縁はみんな〔本〕性の暁あかりである。もともと迷っている人も悟っている人もいるわけではない。ただ、今日〔この場で〕ケリをつけさえすればよいのだ」と言ったのだ。ここで指を三回弾く。

もろもろの仏弟子たちよ、そのまま〔余計なことをせず〕にありのままやり来なさい。〔そうすれば〕菩提心の光明かみんはあまねく眼根めにそなわり、菩提心の音声はすべて耳処みみにおさまり、〔六道の中の〕三つの善い世界（である天上・人間・修羅の世界）にいても安楽に迷わされぬし、三つの悪い世界（である畜生・餓鬼・地獄の世界）にいてもは苦しみに執とわれることもなくなる。〔そうなれば、〕『華嚴經』にもあるように、「心である仏もまたそのようであり、仏である衆生も〔また〕そのようであり、心と仏と衆生の三つに、〔何らの〕差別ちがはない」こと

になるのである。

お前たち、もろもろの仏弟子たちよ、今より以降、菩提心を家舎とするならば〔思いのまま〕自由に安住する〔ことができる〕し、菩提心を〔修行する〕園林とするならば無礙に遊行する〔ことができる〕し、菩提心を〔坐禪する〕牀座とするならば宴かな場所で逍遙めるし、菩提心を〔我が〕師とするならば三昧が成就できるのである。小さな一つ一つの塵の中に毘盧遮那仏の性海が入っており、どこでも善知識の〔悟りの〕門に出会えるのだ。一歩も動かずに直ちに覚りの城に至り、微塵の隔たりもなく完全に宝の所に帰り着く〕とでも言うことができよう。

私には今、「発菩提心真言〔菩提心を起こさせる真言〕がある。〔これから誦えるから〕しっかりと聴きなさい。

唵 オン 冒地 ボウジ 嚩多 シツク 母怛波 ボダハ （怛波という） 二 （字を二音として） 合 （合わせて発音する） 那野 ナヤ （ヤーと音を引す） 弥 ミ

*

(1) 愛河 〓 仏教で愛欲が人を溺れさせるのを河に喩えていう。〔『大漢和』卷四・p.1124〕

(2) 仏乘 〓 仏となる目標とする道。乗は乗り物で教えること。大乘に同じ。一切の衆生を成仏させる教えること。仏道。

すべての者を仏たらしめる教え。〔『広説』p.1465〕

(3) 八識 〓 唯識説でたてる意識作用の八種類。眼識・耳識・鼻識・舌識・身識・意識・末那識・阿頼耶識のこと。〔『広説』p.1361〕

(4) 六趣 〓 六道に同じ。衆生が業（意志にもとづく生活行為）によって生死を繰り返す（住む）六つの世界。地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天。〔『広説』p.1771〕

(5) 華嚴 〓 華嚴経のこと。大乘經典の二で、漢訳として現在、東晋の仏跋跋陀羅訳（旧訳華嚴経六〇卷）・唐の实叉難陀訳（新訳華嚴経八〇卷）・唐の般若訳（四〇卷）の三種が伝えられている。全世界を毘盧遮那仏の顕現とし、微塵の中に全世界を映じ、一瞬の中に永遠を含むという一切一切一切即一の世界を展開している。

(6) 故華嚴云、知一切法、即心自性、成就慧身、不由他悟。新訳八十卷本『華嚴経』卷一七 (T10・89a) からの引用。旧訳六十卷本『華嚴経』は「知一切法真实性、具足慧身、不由他悟」(卷八、T9・449c) となつてゐる。

(7) 觀体ニ身ぐるみ、丸」と。(『広説』p.1205)

(8) 全機ニ全分の機用の意。もののはたらき、機能の一切。生活の全体。全人格。全人格をはたらかせること。(『広説』p.1026)

(9) 領荷ニ「領」は「統べる」の意、「荷」は荷なうの意で、統率し担いでいくこと。

(10) 所以道、方法は心光、諸縁皆性暁、本無迷悟人、只要今日了ニ龍濟紹修(嗣羅漢桂琛)の頌として知られ、『聯燈会要』卷二六 (Z136・440b)、『五燈会元』卷八 (Z138・154c) に見える。龍濟については『禪学大辞典』の「紹修」条 (p.553) 参照。

(11) 心光ニ①心から諸現象が顕現すること。②仏が慈悲の心を照らすところの光明。仏光を光に喩えていう。(『広説』p.947)

(12) 三善道ニ三悪道の対。善業の結果おもむく善い所の意。修羅・人・天の三趣。つまり六道の上三つ。(『広説』p.594)

(13) 三悪道ニ三善道の逆。三種の悲しき世界の意で、すなわち悪行によつて生まれる地獄・餓鬼・畜生の世界をいう。(『広説』p.560)

(14) 惟心仏亦爾、惟仏衆生然。心仏及衆生、是三無差別。旧訳六〇卷本『華嚴経』卷一〇に「心如工画師、画種種五陰、一切世界中、無法而不造。如心仏亦爾、如仏衆生然。心仏及衆生、是三無差別」(T9・465c) とあるのを踏まえる。新訳八十卷本『華嚴経』卷一九の該当部分は、「心如工画師、能画諸世間。五蘊悉從生、無法而不造。如心仏亦爾、如仏衆生然。応知仏与心、体性皆無尽」(T10・102a) となつており、少し表現が違ふ。ちなみに、新訳のこのすぐ後に「若人欲了知、三世一切仏……」という「破地獄偈」が出てくる。

(15) 牀座ニすわる床。例・『正法眼蔵』礼拜得髓。(『広説』p.352)

(16) 毘盧ニ毘盧遮那仏の略。仏智の廣大無辺なことの象徴とし、華嚴経の本尊。(『広説』p.1412)

(17) 性海||真理(真如)を海に喩えたもの。言葉では示すことが出来ない本性の世界でその広く深いことを海に喩えた。(『広説』p.837)

(18) 可謂、不移跬歩、直届覚城、不隔一塵、全歸宝所||典拠を踏まえたように見える言い方であるが、経典・禅録類にはこのままの語は見えない。

(19) 覚城||悟りの内部へはすべての迷いが入らないことを、城に喩えている語。(『広説』p.197)

(20) 宝所||宝の国。珍宝のある場所。究竟の悟りの喩え。(『大漢和』卷三・p.1120)

(21) 唵冒地唧多母怛波三合那野引弥||「発菩提心陀羅尼」と称される陀羅尼で、曹洞宗で用いられる「甘露門」に収載されている。ルビは曹洞宗の慣用音に拠った。木村俊彦・竹中智泰著『禅宗の陀羅尼』(大東出版社・一九九八)の一八一〜一八二頁、坂内龍雄著『真言陀羅尼』(平河出版社・一九八二)の一七二頁を参照。意味は「オーン。私は悟りを求める心を生起せしめよう(われ菩提心をおこさん)」(竹中智泰訳)。

《15》心経・四句回向①(施餓鬼会15、孟蘭盆会16)

誦心経一卷回向云、

汝等鬼神衆、我今施汝供、此食遍十方、一切鬼神共。

『心経』一卷を誦し、回向して曰く、

汝等、鬼神衆よ、我今、汝らに供を施す。此の食は十方に遍く、一切の鬼神共にせん。

『般若心経』一卷を誦誦してから、回向して言う、

お前たちもろもろの鬼神たちよ、我は今汝たちにお供えを施そう。この食べものは十方に遍く〔行きわたるほどたくさんあり〕、すべての鬼神が共に〔食べることが〕できるだろう。

*

(1) 汝等鬼神衆、我今施汝供、此食遍十方、一切鬼神共。この四句偈は、遵式「施食法式」(『施食通覧』・Z101・215c)に見える。名称については、「出生念偈」(『叢林校定清規總要』卷下・Z112・26c)、「出生想念偈」(『勅修百丈清規』卷六・T48・1145a)、「出生偈」(『禪苑清規』卷一・Z111・441c)、「釈氏要覽」卷上・T54・275a、「入衆日用」・Z111・473a、「入衆須知」・Z111・475c)、「施食偈」(『禪門諸祖師偈頌』卷下之下・Z116・486a)などと呼ばれ、ほとんどの資料はこのままの文字であるが、『釈氏要覽』卷上は第三句が「七粒遍十方」となり、『勅修百丈清規』は第四句が「一切鬼神供」となっている。

《16》四句回向②(施餓鬼会16、盂蘭盆会17)

願以此功德、普及於一切、我等与衆生、皆共成仏道。

*

願わくは此の功德を以て普く一切に及ぼし、我等と衆生と、皆な共に仏道を成ぜんことを。

*

どうか、この功德を普ねく一切(の生きとし生けるもの)に及ぼして、我たちも衆生も皆な一緒に仏道を成就できますように。

*

(一) 願以此功德、普及於一切、我等与衆生、皆共成仏道。『法華經』卷三「化城喻品第七」(19・24)にある偈の一節。偈文の前に「時諸梵天王、即於仏前、一心同声、以偈頌曰」とあることから、「一心同声偈」などと呼ばれている。

〔17〕孟蘭盆(孟蘭盆会8)

若是孟蘭盆施食時、可於入座鳴尺一下處、改白後文、至懺悔偈、亦同前文結果。

諸仏子等、梵語孟蘭盆、此名解倒懸器。謂倒懸者、乃繫形于千仞之顛、將墜於無涯之底。苦之一言、不可云喻。原夫平等真法界、無仏無衆生。安有倒懸之說乎。良由最初不覺、暫起妄心、外形十界染淨之殊、内蘊八識悟迷之別。由是以妄見繩、繫無明質、倒懸於諸根塵識千仞之顛、下望輪廻生死無涯之底、諸境界風、念念撼揺、莫之休息。聖賢目為可憐憫者。是故慈不欲興而興、哀不欲至而至。況是青提犯重而難拔、目連感深而欲追。啓如來之本懷、成菩薩之大願。教由斯致、相伝二千余載。有仏住處、安得不効良規而攀勝軌也。上來加持密呪、普施甘露。想諸仏子、已皆飽満。苟不洞明道本、徹見法源、不惟飢属倒懸。今雖飽足、亦未嘗非倒懸者。豈惟飽足。

〔校注〕(一) 施 統蔵本は「絶」に作るが、原本は「施」であり、意味からいっても統蔵本の誤植であろう。

*

若し是れ孟蘭盆、施食の時ならば、「入座鳴尺一下」の処に於いて、改めて後文を白し、「懺悔の偈」に至つて、亦た前文と同じく結果す可し。

諸もろ仏子等よ、梵語に孟蘭盆、此に名づけて倒懸の器と解す。倒懸と謂うは、乃ち形を千仞の顛に繫け、

將に涯無きの底に墜ちんとするなり。苦の一言、喩えを云う可からず。原ぬるに夫れ平等なる眞の法界は、
仏も無く衆生も無し。安くんぞ倒懸の説有らんや。良に最初に不覺にして、譬として妄心を起こすに由り
て、外は十界染淨の殊なりを形し、内は八識悟迷の別を纏う。是れに由りて妄見の繩を以て、無明の質を繫
ぎ、倒に諸もろの根塵識の千仞の顛に懸かりて、下、輪廻生死の涯無きの底に望み、諸もろの境界の風、念
念撼揺して、之が休息すること莫し。聖賢日けて憐憫す可き者と為す。是の故に慈興すことを欲せずして興
り、哀至ることを欲せずして至る。況や是れ青提犯重くして抜き難きも、目連感深くして追わんと欲するをや。
如来の本懷を啓き、菩薩の大願を成ず。教、斯れに由りて致され、相伝すること二千余載なり。仏の住処有り、
安くんぞ良規に効いて勝軌に攀らざることを得んや。上来、密呪を加持し、普く甘露を施す。想うに諸もろ
の仏子、已に皆な飽滿せん。苟し道本を洞明し、法源を徹見せずんば、惟だに飢、倒懸に属するのみにあらず。
今、飽足すと雖も、亦た未だ皆て倒懸する者に非ずんばあらず。豈に惟だ飽足するのみならんや。

*

【注意書き】もし孟蘭盆で施食(施餓鬼の供養)をする時には、「前出の」「入座鳴尺一下」(7)のところで、
改めて以下の文章(17)〜(20)を(差し替えて続けて)読み、「懺悔の偈」(20)のところまで行って、ま
た前文(の「懺悔の偈」の後(11)まで戻って、このすぐ前の文章まで続け、以下の文章が無い場合)と同
じように終わらせるようにしなさい。

もろもろの仏子たちよ、梵語で「孟蘭盆」、ここ「中国の言葉」では「倒懸の器」という名称で解釈する。「倒
懸」というのは、形を千仞(≡千五百メートル)もある(山の)頂きからぶら下げ、果てのない(谷)底に墜ちよ
うとしているようなものだからである。「その」苦しみは、たとえて言えるものではない。そもそも平等な眞
理の法界には、仏とか衆生とか(という差別)は無い。どうして「倒懸」などという話があるのか。「二番」最初

の時に「真理を」覺らず、ちらりと妄心を起すから、「我が身の」外には「地獄世界から仏の世界まで」十分に分けられる淨穢の世界が現れ、内には「感覺作用やそれを支える根因である阿頼耶識といった」八識による悟りと迷いの区別が蓄えられることになる。そこで、妄見という繩で無明にそまつた質を繋ぎ、六根・六塵・六識によつて作り上げられた感覺世界の大きな山の頂きから逆さまにぶら下げられ、下には生死輪廻という果てのない「深い」底を望み、いろいろな境界の風が一瞬一瞬休みなくゆり動かすのである。聖人賢者は「これを」憐れむべきものと呼ぶ。だから、慈（悲の心）は興そうと思わないでも興り、哀れみ（の気持ち）は出てこさせようと思わなくても出てくるのである。まして、「目連尊者の母親であつた」青提が重（い罪業）を犯して救いがたかつたとしても、「子供である」目連尊者が「母親を思う」深い気持ちで追善（供養）したいと思つたのは当然のことであつたろう。「目連尊者の熱意に動かされて、一切の衆生を濟度しようという」如来の本懐が開示され、「衆生を苦しみから救いたいという」菩薩の大願が成就された。「そして」これによつて「『孟蘭盆經』の」教えが与えられ、二千年以上伝えられてきたのである。「『孟蘭盆經』という」仏の「教えの」住処があるのだから、どうして立派ですぐれた「その」規軌に学び頼らなくてよいであろうか。先ほど、密呪を「唱えて」加持して、普く「衆生へと」甘露を施したから、諸々の仏弟子たちは皆すでに飽満したことであろう。「しかし」もし仏道の本体を洞明かにし、仏法の根源を徹見していないならば、飢え（の苦しみ）が「倒懸」に属しているだけなのではない。今、飽足になつたとしても、まだ「倒懸」になつた者にほかならないのだ。どうして飽足になるだけで「すむ問題で」あろうか。

*

(一) 不覺 ① さとらないこと。② 心の本性に対する迷妄、迷い。真如の法が本来、平等一味・無差別であることをそのままに覺知することができない迷妄。(不覺な無明で、これに根本無明と枝末無明とがあり、前者は迷真、すなわち真

如が自身を隠し、後者は起妄、すなわち無明が真如を覆う。〔起信論』T30・576b・577a) ③
道理のわからないこと。④前後不覚。無意識の状態。⑤覚悟がすっかりしていないこと。〔中村』p.1156-7)

(2) 十界に迷いと悟りの世界を十種に分けたもの。すなわち、地獄界・餓鬼界・畜生界・阿修羅界・人間界・天上界・声聞界・縁覚界・菩薩界・仏界。地獄界から天上界までの六つの界が凡夫の迷いの世界、その後の四つの界が聖者のさとりの世界であり、合わせて六凡四聖という。地獄から天上までの六界は小乗仏教でもいわれているが、大乘仏教、特に天台の教学では、声聞から天上までの四界を付加して十界とする。四趣・人天・三乗・菩薩・仏と分けたり、三悪道(三途)・三善道・二乗・菩薩・仏と分けたりすることもある。前六界は、苦しみに満ち、業によって輪廻転生する世界で、六道輪廻という。天台宗では、『法華経』の一切成仏思想にのっとり、十界のおおの十界を有する(十界互具)と説く。〔中村』p.591-2)

(3) 八識に唯識説で立てる八つの識。眼識・耳識・鼻識・舌識・身識の五識と、第六の意識と第七の末那識と第八のアライヤ識とをいう。〔中村』p.1108) 三界のうち、欲界の生きものは六識を有し、色界の初禪天には鼻・舌の二識がなく、二禪天以上には五識がなく、意識のみである。(同前・p.363)

(4) 根塵識に根は眼・耳・鼻・舌・身・意の六根、塵は六根に対する色・声・香・味・触・法の六塵、識は六識で、合わせて十八界をいう。〔中村』p.425)

(5) 青提に目連尊者の母親の名前。慳貪の罪によって餓鬼道に墮ちたとされる。『盂蘭盆経疏』巻下に「目連名羅卜、母字青提」(T39・509c)とあり、『北山録』巻六に「目連母、長爪梵志族、青提也。以慳貪不信沈惡趣、目連得道、持食而往濟之」(T52・608b)とある。

《18》六道（孟蘭盆會9）

只如六道以天為最。天之本因、由捨棄諸惡、業修衆善、希求福果。乃度此倫、真心未悟、已涉倒懸。況七珍之飲饌、隨欲念而變生、百宝之衣冠、任愛心而展布、以天衆觀、著而為業、惟仏知見是真倒懸。豈待五衰相見而然也。今之海内、人類充塞。乃天道之次者也。愛染不息、雜諸善行、來此此倫。身居極品之謂貴、家貯多金之謂富、博涉文言之謂聰、飽閱春秋之謂壽。或不頓明至理、廓悟真常、一報忽終、倒懸安積。而況癯殘鰥寡、孤苦流連、依正俱空、死生無倚。此亦豈待報尽。而倒懸之跡、無時不在焉。

阿修羅屬、又人道之次者也。由徧求福果、純執勝心、聚積欲貪、以沈斯類。無福鬼趣、有福天倫。以嗔鬪之不忘、処倒懸而自苦。何當業極而致報終。飄喪有期、墜墮無底。

此三善道之倒懸也。是大悲願王、深憐而痛憫者。且三善道之倒懸若此。況地獄・餓鬼・畜生、三種惡道、倒懸之苦、可勝道哉。是等皆以貪嗔痴為因、殺盜淫為緣。欲界・色界・無色界為果報。

在地獄則乘而為鉄輪、履而為劍刃、動而為飛墜、靜而為囚縛。与夫八寒八熱、以至無間、倒懸之苦、備極於斯。地獄之報既消、散形而入鬼趣、形体既虛、威光不具。常居穢隙、每処暗途。渴而得水、亟變為洋銅、飢乃逢食、遽化為焦燄。受飢餓者數百劫、沈幽暗者十二時、具言其苦辛、又不止於倒懸也。

鬼趣業尽、散入畜生、來償宿債。空飛水躍、樹宿山栖、以強吞弱、以大食小。徧彼之悲無間、吞嗜之苦何窮。羽毛之類既多、鱗介之族尤盛。惡業軋熾、狀兒愈乖。蠢蠕飛搖、難可枚拏。腐肝腸於鼎鑊、碎骨血於刀砧。所謂倒懸、似未能尽喻畜生之苦也。三惡道衆、倒懸之苦、若使広陳、窮劫不尽。

總而言之、三善道之昇、未明道本、昇亦倒懸。三惡道之沈、不悟苦因、倒懸無已。

〔校注〕（一）闕||原本「闕」に作る。同字は『大漢和辞典』卷一一（G.116）に見え、音は「クワツ」とするが、「義未詳」とする。恐らく「闕」の誤りであろう。由りて改正す。

*

只如^{たと}えば六道は天を以て最と為す。天の本因は、諸悪を捨棄し、衆善を業修し、福果を希求するに由る。乃ち此の倫に度^{わた}るも、真心未だ悟らずんば、已に倒懸に渉る。況や七珍^{〔一〕}の飲饌、欲念に隨いて変生し、百宝の衣冠、愛心に任せて展布するに、天衆の觀を以てすれば、著して樂と為すも、惟だ仏のみ是れ眞の倒懸なりと知見するをや。豈に五衰^{〔二〕}の相見^{あは}れるを待ちて然らんや。

今の海内、人類充塞す。乃ち天道の次なる者なり。愛染息まざるも、諸もろの善行を雜^{まじ}え、來りて此の倫に処す。身、極品に居す之を貴と謂い、家、多金を貯う之を富と謂い、博く文言に渉る之を聡と謂い、飽くまで春秋を閱す之を寿と謂う。或し至理を頓明し、真常を廓悟せずんば、一報忽ち終わる。倒懸安くんぞ釈^とかん。而るを況や癡殘鰥寡、孤苦流連^{〔三〕}、依正俱に空なるも、死生に倚無きをや。此れ亦た豈に報尽くるを待たんや。而ち倒懸の跡、時として在らざる無きなり。

阿修羅の属は、又た人道の次なる者なり。偏^{ひとよ}に福果を求め、純ら勝心に執し、欲貪を聚積するに由りて、以て斯の類に沈む。福無きは鬼趣、福有るは天倫。嗔鬪の忘れざるを以て、倒懸に処して自ら苦しむ。何か^{〔四〕}当に業極りて、報終わるを致すべけん。飄喪に期有るも、墜墮に底無し。

此れは三善道の倒懸なり。是れ大悲願王、深く憐みて痛く憫む者なり。且つ三善道の倒懸すら此くの若し。況や地獄・餓鬼・畜生、三種惡道の倒懸の苦は、道^いうに勝^たう可けんや。是れ等は皆な貪・嗔・痴を以て因と為し、殺・盜・姪を縁と為し、欲界・色界・無色界を果報と為す。

地獄に在りては則ち乘りて鉄輪と為り、履きて劍刃と為り、動きて飛墜と為り、靜にして囚縛と為る。夫の八寒八熱^{〔五〕}より、以て無間に至るまで、倒懸の苦、備^つに斯^{こゝ}に極まる。

地獄の報既に消ゆれば、形を散じて鬼趣に入る。形体既に虚なれば、威光具わらず。常に穢隙に居し、毎^{つね}

暗途に処す。渴して水を得るも、亟かに變じて洋銅と爲り、飢えて乃ち食に逢うも、遽かに化して焦骸と爲る。飢餓を受くること數百劫、幽暗に沈むこと十二時、具に其の苦辛を言わば、又た倒懸に止まらざるなり。

鬼趣の業尽くれば、散じて畜生に入り、来たつて宿債を償う。空に飛び水に躍り、樹に宿り山に栖み、強を以て弱を呑み、大を以て小を食う。徧彼の悲悶で無し、吞嗜の苦何ぞ窮まらんや。羽毛の類既に多く、鱗介の族尤も盛んなり。悪業転た熾んにして、状兒愈いよ乖く。蠢蠕飛揺、枚挙す可きに難し。肝腸を鼎鑊に腐らせ、骨血を刀割に碎かる。所謂倒懸も、未だ尽く畜生の苦を喩うること能わざるに似たるなり。三悪道衆の倒懸の苦は、若使し広く陳ぶれば、窮劫も尽くさず。

総べて之を言え、三善道の昇は、未だ道本を明らめずんば、昇るも亦た倒懸なり。三悪道の沈は、苦因を悟らずんば、倒懸にむこと無し。

*

たとえ、輪廻の範疇にある世界である。六道は、天上世界を最高位とする。天上世界に生まれる根本原因は、諸々の悪行を捨て去り、諸々の善行を喜んで修め、果報としての福を希求することにある。そして「生まれ変わって」この「天上世界の」仲間に入ったとしても、眞の心をまだ悟っていないければ、すでに「倒懸」に関わっていることになる。まして、「天上世界では」種々の珍味の飲饌が「その」欲念のままに変生たり、種々の宝物にかざられた衣服や冠が「その」愛心のままに展布れたりし、天上世界の人々の觀では「それを」安樂（なことだ）と執着しているが、仏だけは、これこそ眞の「倒懸」だと知見しているのだ。どうして「天人の死が近いことを示す」五種類の兆候が現れ「苦しむことにな」るのを待つ必要があるうか。

現今の海内には人類が満ちあふれているが、「その人間世界が」天上世界に次ぐものである。愛染が息むこととは、諸々の善行を雑え（行なつ）て、この「人間世界の」仲間に入つて来ているのだ。「その」身が最

高の官位にいるものを高貴と言ひ、家に多くの金を蓄えているものを富豪と言ひ、博く文章を涉猟するものを聰明と言ひ、十分に年齢を経たものを長寿と言ふ。「しかし」もしこの上ない真理を頓明らかにし、眞常（の境地）を頓悟（きと）つていなければ、「人間としての」一度かぎりの果報はたちまち終わつてしまうのだ。「倒懸」（の苦しみ）からどうして解き放たれようか。まして、年老いて身体が不自由だとか、連れ合いの妻や夫を無くしたとか、身寄りがなくて非常に貧しいとか、故郷を離れて放浪していると、「仏の眼から見れば」回りに存在する物事も自分自身も「実体がない」空ではあろうが、生死（の際）に寄る辺がない「苦しみを味わう人々もいる」ではないか。これも「天人同様」果報が尽きてしまうのを待つまでもなく、「倒懸」（の苦しみ）の痕跡が何時も存在しているのである。

阿修羅の仲間、さらに人間世界に次ぐものである。ひたすら功德という果報を求め、もつぱら（悟りを求めようという）殊勝な心に執着し、貪欲を積み重ねるから、この仲間沈んでしまうのである。功德がないものは餓鬼の世界、功德があるものは天上世界（に在ると同じ）であり、怒りや争いを忘れられないから、「倒懸」（の状態）になつて自ら苦しむのである。何時になつたら（その）業が尽き、果報が終わることになるであろうか。漂泊や服喪には終わりの時があるが、「倒懸」の谷には「墜墮んでい（つて行き着）く底がないのである。

以上は「六道のうち」三つの善い世界での「倒懸」（の苦しみ）であり、「すべての衆生を救おうという」大悲願をたてた王が、痛切に憐憫（あわれ）むものである。三つの善い世界の「倒懸」でさえそうなのである。まして、地獄・餓鬼・畜生という、三種類の悲しき世界の「倒懸」の苦しみは、言うに堪えない。これら「三種類の悲しき世界におちるの」は、すべて貪（むさぼり）・嗔（いかり）・痴（おろかさ）を因とし、殺生・偷盜・邪淫を縁とし、欲界・色界・無色界（というこの世界での輪廻）を果報としている。

地獄においては、「何かに」乗れば「自分をひき殺す」鉄の車輪となり、「何かを」履けば「自らを切り裂く」剣刃となり、動けば墜落し、ジツとしていれば縛り付けられてしまう。かの八寒地獄や八熱地獄から無間地獄まで、「倒懸」の苦しみは、ことごとくここに極まつている。

地獄の果報が消えてしまえば、形は飛散して餓鬼の世界に入る。形体は「実体が無く」虚だから、「立派な」威光も具わっていない。常に穢い隙間で居し、いつも暗い途にいる。喉が渴いて水を得ても、すぐに煮えたぎつた「液体の」銅に変わつてしまい、飢えて食べものに出会つても、にわかには焦焔に変わつてしまう。飢餓「状態」を数百劫「もの長い間」受けつづけ、一日中幽暗に沈んだままであり、その辛苦をすべて言うならば「倒懸」の段ではない。

餓鬼の世界での業が尽きてしまうと、「形は」飛散して畜生「の世界」に入り、「この世に」来て過去世の負債を償ふことになる。「鳥になつて」空を飛んだり、「魚になつて」水を飛び跳ねたり、樹木に宿つたり、山に住んだり、強いものが弱いものを「餌として丸ごと」呑みこみ、大きなものが小さなものを食らう。逃げまどう悲惨さは間断がないし、呑嗜られる苦しみは終わりになることがない。鳥や獣の類も多いが、魚類や貝類はとりわけ盛んである。悪業がますます熾烈になれば、姿形がいよいよ「あるべき姿から」乖離してしまふ。うごめき飛び交う「昆虫の類の多さ」は、枚挙できないほどである。「裂かれた」肝腸を「お供え物を入れる」鼎鏝「の中」で腐らせ、骨血を包丁・まな板で碎かれる。いわゆる「倒懸」も、まだ畜生の苦しみをことごとく喻えることはできないようだ。「六道のうち」三つの悪しき世界の衆生の「倒懸」の苦しみは、もし広範に述べらば、窮劫に尽きることがないのだ。

まとめて言うならば、「六道の中の」三つの善い世界に昇つても、まだ仏道の根本を明らかにしていないならば、昇つたとしても「倒懸」の苦しみである。三つの悪しき世界に沈むとしたら、「もし」苦しみの原因

を悟らなければ、「倒懸」〔の苦しみ〕が終わることはない。

*

(1) 七珍Ⅱ一般には「七宝をいう。珍しい宝物」(『中村』p.585)、「七つの珍重すべき宝」(『大漢和』卷・p.97)とされるが、ここでは「広く各種の美味を指している(泛指各種美味)」(『漢語大詞典』第一冊・p.157)。

(2) 五衰Ⅱ天人が死ぬ前にその身体などに現れる五種の衰亡の相。①頭上の花(または冠)がしばむこと。②腋に汗が流れること。③衣裳がけがれること。④身の威光を失うこと。(または目をしばしばまたたく、また身に臭気を生ずること。)⑤本座に居ることを楽しまないこと。(または王女が違叛する。)『俱舍論』(一〇卷)などには、これを大衰相とし、別に小衰相があると説く。死の衰弱。(『中村』p.370)

(3) 癯残鰥寡、孤苦流連Ⅱ「癯残」は「衰老病弱、肢体残廢」(『漢語大詞典』第八冊・p.354)、「つまり年を取り病気がちで肢体が不自由になること」。「鰥寡」は『孟子』梁惠王篇に「老而无妻曰鰥、老而无夫曰寡」とある様に、年老いて妻のいない男と、夫のいない女のこと。「孤苦」は「身寄りがなく、非常に貧しい」(『新字源』p.268)、「流連」は「故郷をなれてさまよう」(同前・p.583)ということ。

(4) 依正Ⅱ依報(環境世界)と正報(われわれの身心)。報は果報。正報は正しく生存者その者に報いられた果報であり、依報は正報のよる所で、国土・山河等をいう。過去の業によって受けた身心を正報、その身心のよりどころとなる世間を依報という。衆生の住する環境(山河国土)と、そこにどどまる衆生の身心。過去の行為の報いとして受けた現在の身心と、その身心のよりどころとなる環境世界。ともに前業の報いである。国土とそこに住む人。世界と人びと。

国土と衆生。(『中村』p.101)

(5) 何当Ⅱへいつかまさに…すべけん) いつか。いつかは…したい(そうになりたい)、という願望をこめて言うのが普通。散文よりも詩に用いることが多い。(『禪語辞典』p.43)

(6) 八寒八熱Ⅱ八寒地獄と八熱地獄。八熱地獄は、熱気で苦しめられる地獄の総称。①等活。鉄棒や利刀で罪人の肉を裂き、死んでは蘇生して苦しみが続く。殺生の罪の者が墮ちる。②黒繩。熱鉄の縄で縛られる。③聚合。赤熱のくちばしをもつ鷲や、葉が刀でできた林に入つて苦しみを受ける。殺生・偷盜・邪淫の者が墮ちる。④叫喚。熱湯の大釜や大火の燃える鉄室で苦しみを受ける。殺生・偷盜・邪淫・飲酒の罪の者が墮ちる。⑤大叫喚。人間の八百年が化樂天の一日一夜、化樂天の八千年がこの地獄の一日一夜とされ、殺生から妄語の罪の者が墮ちる。⑥焦熱。⑦大焦熱。⑧無間(阿鼻また無救)。極苦の地獄で七重の鉄城があつて、銅が沸いて罪人を焼き殺す。五逆罪のほかに、大乘を誹謗した者が墮ちるといふ。(『中村』p.1105) 八寒地獄は、寒冷に苦しませる地獄を八種に数えたもの。八熱地獄のおおのの傍らに、また一つずつ寒冷な地獄があるのをいふ。この大陸の下、五百ヨージヤナのところにあるといふ。(同前・p.1107)

(7) 無間Ⅱ阿鼻と音写。前注の八熱地獄の第八。また無救とも漢訳する。苦しみを受けることが絶え間ない(無間である)から、また樂の間^まじることがないから、無間と名づける。はげしい苦しみの絶えない世界。極苦の地獄で七重の鉄城があつて、銅が沸いて罪人をたぎ殺す。(『中村』p.1322)

(8) 徧徧Ⅱ何れの文字も『大漢和辞典』『漢語大詞典』といった辞書類には見えないため、意味が分からない。和刻本は「イツ・エツ」とルビを振っている。似た字として、徧は「①くるう。狂人。②狂鬼。③奇怪なさま」(『大漢和』巻一・p.933)、徧は「①くるう。②おどろきあわてるさま。③獸の走るさま」(『大漢和』巻七・p.738)、徧は「うれえる」(『大漢和』巻一・p.680)、徧は「みだす」(『大漢和』巻五・p.166)、徧は「獸のおどろき走るさま」(『大漢和』巻七・p.693)とあるから、恐らくは「獸や鳥たちが狂つたように走り乱れる」といった意味であろう。

〔19〕倒懸解脱の方便（孟蘭盆會10）

汝等当知、諸仏即已解倒懸之衆生、衆生即未解倒懸之諸仏。倒懸既解、衆生界尽、諸仏体空。転三善道、帰第一義天、迷雲自卷。融諸惡趣、入真三昧海、業浪平沈。猶遠客之到家、若貧人之遇宝。名教有言、衆生迷時、指金為銅、及至悟時、了知金體。未解倒懸、妄称六道。倒懸既解、元是一心。故諸仏於無功用中、憫諸仏子、深投業網、久滯冥途、於此心内、熱而為香、散而為花、然而為燈、施而為食、猷而為果、掬而為塗、以至無尽法財、滿為七種供養。与諸仏子、特為莊嚴。莊嚴已具、若不披陳懺悔過去現在身口意業、則倒懸不可解。既懺悔已、若不帰依三宝、称仏為師、則倒懸不可解。既帰依三宝、若不具受如来真淨戒法、則倒懸不可解。既具戒已、若不説四弘誓願、發菩提心、則倒懸不可解。当知、自懺悔而至發菩提心、皆解倒懸之善巧方便也。

〔校注〕（一）元―原本「元」に作るが、意味が通じない。字形が似ていることから「元」の誤りと思われる。

*

汝等当に知るべし、諸仏は即ち已に倒懸を解くの衆生、衆生は即ち未だ倒懸を解かざるの諸仏なることを。倒懸既に解くれば、衆生界尽き、諸仏体空なり。三善道を転じて、第一義天に帰すれば、迷雲自ら卷き、諸惡趣を融して、真の三昧海に入るれば、業浪平沈す。猶お遠客の家に到るがごとく、貧人の宝に遇うが若し。名教に言える有り、「衆生迷える時は、金を指して銅と為す、悟る時に至るに及んで、金の体を了知す」と。未だ倒懸を解かざれば、妄りに六道と称す。倒懸既に解くれば、元より是れ一心なり。故に諸仏、無功用の中に於いて、諸もろの仏子、深く業網を投じ、久しく冥途に滯ることを憫れみ、此の心の内に於いて、熱きて香と為し、散じて花と為し、然して燈と為し、施して食と為し、猷じて果と為し、掬して塗と為し、以て無尽の法財に至るまで、満たして七種の供養と為し、諸もろの仏子の与に、特に莊嚴を為す。莊嚴已に具わるも、若し過去・現在の身口意の業を披陳懺悔せずんば、則ち倒懸解く可からず。既に懺悔し已むるも、若し三宝に帰依し、

仏を称して師と為さずんば、則ち倒懸解く可からず。既に三宝に帰依するも、若し如来の眞淨の戒法を具受せずんば、則ち倒懸解く可からず。既に戒を具え已わるも、若し四弘の誓願を設けて、菩提心を発さずんば、則ち倒懸解く可からず。当に知るべし、懺悔よりして菩提心を発すに至るまで、皆な倒懸を解くの善巧方便なることを。

*

お前たちは知つておかねばならない、諸仏とは既に「倒懸」から解かれた衆生にほかならず、衆生とはまだ「倒懸」から解かれていない諸仏にほかならないということ。倒懸が解けてしまえば、衆生の世界は無くなり、諸仏それ自体がそのまま空である。三つの善い世界を移して「仏の世界である」第一義天に帰入させれば、迷いの雲は自然に巻き（とられて無くなり）、諸々の悪しき世界を融かして本當の三昧の海に入れるならば、「悪」業の浪はおさまる。ちようど遠方に出ていた旅人が「自分の」家に帰り着いたようなものであり、「また」貧乏な人が宝物に出会ったようなものである。儒教でも言っている、「衆生は迷っている時には、黄金を指さして銅だとするが、悟つた時になつて、黄金の本体がはつきりと分かるのだ」と。また「倒懸」から解かれていなければ、みだりに六道とよぶが、「倒懸」から解かれれば、もとより一つの仏心である。だから諸仏は、功用が「必要」無い「悟り境地の」中において、諸々の仏弟子が深く「悪」業の網を「煩惱の海に」投げ入れて、長い間、「智慧の光のささない」冥途に滞っているのを憫んで、この仏心の中において、「衆生に対する供養のためのお供えを」焼いて香とし、散いて花とし、燃やして燈とし、施して食べものとし、献じて果物とし、「両手で」掬つて塗「香」とし、および無尽の法財とで、「合わせて」七種類の供養でいっぱいにし、諸々の仏弟子のために、特別に莊嚴としたのだ。「だが」莊嚴が具わつたとしても、もし過去世や今の世「に積み重ねたところ」の身（からだ）・口（くち）・意（こころ）の「三悪」業を打ち明けて懺悔しなければ、「倒懸」は解くことができ

ない。「また」懺悔したとしても、もし「仏・法・僧の」三宝に帰依し、仏を師と呼ばなければ、「倒懸」は解くことができない。「また」三宝に帰依したとしても、もし如来の真で淨らかな戒法をすべて受けなければ、「倒懸」は解くことができない。「また」戒をすべ「て受け」たとしても、もし「すべての衆生を救おうという」四つの広大な誓願をたて、「無上の悟りを求めようという」菩提心を発さなければ、「倒懸」は解くことができない。「以上の」懺悔から菩提心を発すまで「の段階の積み重ね」が、すべて「倒懸」を解く善巧な方便であることを知っておかねばならない。

*

(一) 第一義天 第一義空の理を天にたとえたもの。仏はこの真理のうちに住するので、この語は仏のことをさす。〔『中村』 p.932〕

(2) 名教有言、衆生迷時、指金為銅、及至悟時、了知金体 典拠未詳。

《20》懺悔（孟蘭盆会1）

我今依憑聖教、首為諸仏子、懺悔身口意所作十不善業。仰憑大衆、各運誠心、隨我称和。汝諸仏子、生難遭想、具希有心、諦聽諦聽。

往昔所造諸惡業、皆由無始貪瞋癡、從身口意之所生、一切我今皆懺悔。 三唱
我今有滅罪障真言。諸仏子、至心諦聽。

唵薩嚩波波尾沙普三合吒捺賀引曩嚩日囉三合野引娑嚩三合引賀引

*

我今、聖教に依憑して、はじめに諸もろの仏子の為に、身口意作す所の十の不善業を懺悔せん。仰いで大衆に憑むらくは、各おの誠心を運らし、我に隨いて称和せんことを。汝ら諸もろの仏子よ、遭い難きの想を生じ、希有の心を具えて、諦聽せよ諦聽せよ。

往昔造る所の諸もろの悪業は、皆な無始の貪瞋痴に由りて、身口意より生ずる所なり。一切我今皆な懺悔す。三唱

我に今、罪障を滅する真言有り。諸もろの仏子よ、至心に諦聽せよ。

唵薩嚩跋波尾莎普二合す 吒捺賀引く 嚩嚩曰囉二合す 野引く 娑嚩二合し引く 賀引く

*

私は今、聖の教えに依憑して、「まず」最初に諸々の仏弟子たちのために、身(からだ)・口(くち)・意(こころ)が作りだす十の不善の業を懺悔しよう。どうか大衆にお願ひしたい、各々誠心をはたらかせ、私に従つて唱和しなさい。お前たち、もろもろの仏弟子たちよ、「仏の教えには」遭い難いのだという思いを起こし、「この場において仏の教えを聞けるのは」希有なことだという心を用意して、よく聴きなさい。

往昔造つた諸々の悪業は、皆な無始の貪(むさぼり)・瞋(いかり)・痴(おろかさ)によつて、身(からだ)・口(くち)・意(こころ)より生じたものである。「その」一切を私は今皆な懺悔する。三唱唱える。

私に今、罪障を滅ぼす真言がある。諸々の仏弟子たちよ、心を至てよく聴きなさい。

唵薩嚩跋波尾莎普二つの字を合せて一音として読む 吒捺賀引く 嚩嚩曰囉二つの字を合せて一音として読む 野引く 娑嚩二つの字を合せて一音として読む 賀引く

*

(一) 十不善業 十悪のこと。殺生・偷盜(盗み)・邪淫・妄語(偽り)・綺語(ざれごと)・惡口・兩舌(二枚舌)・貪欲・瞋恚。

愚痴の十の悪業をいふ。(『中村』p.651)

(2) 往昔所造諸惡業、皆由無始貪瞋癡、從身口意之所生、一切我今皆懺悔。《10》に既出。

(3) 唵薩嚩跋波尾莎普三合吒捺賀引疑嚩日囉三合野引娑嚩三合引賀引。《10》に既出。

《21》宣疏(孟蘭盆会18)

大元国浙西道湖州路城北下山幻住禪庵沙門某甲

右、某謹露丹衷、上于洪造。願垂哀憫、俯賜鑑知。

七月十五日恭遇本師釈迦如来聖制円成孟蘭盆大齋之日。思念夙生父母、及現世父母、師長檀越、恩有冤親、及四生六道、諸惡趣中、受苦衆生、莫由解脫。謹於今宵、營備香花燈燭茶果珍羞、如法供養常住三宝、法界聖賢、僧道衆、披閱大方広仏華嚴經、大乘妙法蓮華經、大方広円覚修多羅了義經、大仏頂如来密因修証了義諸菩薩万行首楞嚴經、維摩詰所説經、大乘金剛般若波羅密經、大乘方等金光明經、大乗般若密多仏祖海藏心經、大悲心円満秘密神呪、大仏頂万行首楞嚴神呪、称揚摩訶仏母聖号、満散判施清浄平等広大甘露法食一器。

所集如上功德、一心奉為法界之内天道衆、人道衆、修羅道衆、地獄道衆、餓鬼道衆、畜生道衆。願乘仏力、来赴法筵。

一心奉為過去現在、引頌開導、勸發提携、方便作成、親教難度、一切師友眷属。鑑此真誠、同趨法会。

一心奉為同居僧道、各各生身父母、七世父母、及曩却受形、積生稟命、一切父母。願乘仏力同霑甘露。

一心奉為過去劫中、現在世内、四事供給、諸大檀越、及外護法門、王侯宰輔、路州県鎮、文武官僚、長者

命婦、居士善友、問道請益、諸弟子等。願乘茲濟、俱降法筵。

一心奉為九州分野、十二類中、遠及余方、近於當處、孤魂滯魄、男女老少、空居水陸、鱗甲羽毛、有情無情、一切種類。同乘仏力、共赴法筵。

一心奉為尽虚空、遍法界、微塵刹土中、過去現在、及与未來、諸含識等、或沈苦海、或溺愛河、或住邪林、或潛幽室、或居水際、或墮崖巔、或處險場、或栖穢隙、或居孔穴、或滯幽冥、乃至諸不善處、衆惡聚中、同業所纏、靡思悔悟、雖累乘良濟、未獲超界。願乘今夜之普慈、同了多生之重垢者。

右、伏以諸仏心内衆生、結法界海深沈之業衆生心内諸仏、興孟蘭盆普濟之慈。由一念之悟迷、成三際之苦樂。刀山劍戟、皆成等正覺之場。宝地玉階、乃瓢墮輪廻之域。自業變化而何極。心法出現而靡窮。所以古宿云、撲落非佗物、縱橫不是塵、山河及大地、全露法王身。於斯領旨、當處知歸、融諸仏子之自心、入大涅槃之真際、一切處無苦可厭、一切處無樂可欣。塵塵取捨既忘、念念愛憎必尽。何冤可解、何親可依。煩惱即菩提、頓証大円鏡智。無明即解脫、全該勝功德身。紫梅檀影裏、俯仰折旋。水流元在海。紅菡萏花間、見聞知覺。月落不離天。飽甘露味於此時、現優曇花於永劫。

恭惟 仏心印知 群靈昭格 功徳文疏

年月日

某庵沙門某疏

〔校注〕

(一) 王統藏本は「主」に作るが、和刻本の「法王」の二字の間に引かれた熟語を示す棒線を見誤つたものであろう。

(二) 印統藏本は「即」に作るが、和刻本に拠り改めた。

(三) 冒統藏本に拠る。和刻本は「冒」に作る。「冒」とも考えられる。

大元国の浙西道湖州路城北下山幻住禪庵沙門某甲

*

右、某謹んで丹衷を露わして、洪造を上ぶ。願わくは哀憫を垂れ、俯して鑑知を賜え。

七月十五日、恭しく本師釈迦如来の聖制円成、孟蘭盆大齋の日に遇う。夙生の父母及び現世の父母、師長檀越、恩有冤親、及び四生六道、諸悪趣中の苦を受くる衆生を思念するに、解脱するに由し莫し。謹んで今宵に於いて香花燈燭・茶果珍羞を營備して、如法に常住三宝、法界の聖賢僧道衆に供養す。『大方広
仏華嚴經』・『大乘妙法蓮華經』・『大方広円覚修多羅了義經』・『大仏頂如来密因修証了義諸菩薩万行首楞嚴
經』・『維摩詰所說經』・『大乘金剛般若波羅密經』・『大乘方等金光明經』・『大乘般若密多仏祖海藏心經』・
『大悲心円満秘密神呪』・『大仏頂万行首楞嚴神呪』を披閱して、摩訶仏母の聖号を称揚し、満散に、清淨
にして平等広大なる甘露法食一器を判施す。

集むる所の如上の功德は、一心に、法界の内の天道衆・人道衆・修羅道衆・地獄道衆・餓鬼道衆・畜生
道衆の為にし奉る。願わくは仏力に乘じ、来つて法筵に赴かんことを。

一心に、過去・現在に引領開導して勸谿提携し、方便作成して親く教え難度せしむる一切の師友・眷属
の為にし奉る。此の真誠を鑑みて、共に法会に趨かんことを。

一心に、同居の僧道、各各生身の父母、七世の父母、及び曩劫より形を受け、積生に命を粟くる一切の
父母の為にし奉る。願わくは仏力に乘じ、共に甘露に霑わんことを。

一心に、過去劫の中、現在世の内に四事供給する諸大檀越、及び法門を外護する王侯宰輔、路州県鎮、
文武官僚、長者命婦、居士善友、道を問い益を請う諸もろの弟子等の為にし奉る。願わくは茲の済に乘じ、
俱に法筵に降らんことを。

一心に、九州分野の十二類中、遠くは余方に及び、近きは当処に於ける、孤魂滯魄、男女老少、空居水陸、鱗甲羽毛、有情無情、一切の種類のをにし奉る。同に仏力に乘じ、共に法筵に赴かんことを。

一心に尽虚空・遍法界・徼塵刹土中の過去・現在及び未来の諸含識等の、或いは苦海に沈み、或いは愛河に溺れ、或いは邪林に住み、或いは幽室に潛み、或いは水際に居り、或いは崖巔より墮ち、或いは險場に処り、或いは穢隙に栖み、或いは孔穴に居り、或いは幽冥に滞り、乃至諸もろの不善処、衆もろの惡聚中にて、同じく業に纏われて悔悟を思ふ靡く、累りに良済に乗ずと雖も、未だ超界を獲ざりしもの為にし奉る。願わくは今夜の普慈に乘じ、同に多生の重垢を了する者ならんことを。

右、伏して以るに、諸仏心内の衆生、法界の海に深沈するの業を結ぶ衆生心内の諸仏、孟蘭盆普濟の慈を興す。一念の悟迷に由りて三際の苦樂を成ず。刀山劍峯は皆な等正覺を成ずるの場なり。宝地玉階は乃ち輪廻に飄墮するの域なり。自業變化して、何ぞ極まらん。心法出現して窮まり靡し。所以に古宿云う、「撲落するは佗物に非ず、縦横是れ塵ならず。山河及び大地、全く法王身を露わす」と。斯くに於いて旨を領し、当処に帰を知らば、諸仏子の自心を融して大涅槃の真際に入れ、一切処、苦の厭うべき無く、一切処、樂の欣ぶべき無く、塵塵取捨既に忘れ、念念愛憎必ず尽きん。何の冤か解くべく、何の親か依るべき。煩惱即菩提、頓に大円鏡智を証す。無明即解脱、全く勝功德身を該ぬ。紫梅檀の影裏に俯仰折旋す。水流れて元海に在り。紅菌苞の花間に見聞知覺す。月落ちて天を離れず。甘露味に此の時に飽き、優曇花を永劫に現せんことを。

恭しく惟れば、仏心印知し、群靈昭格せん。胃功德文疏。

年月日

*

某庵沙門某疏

大元国の浙西道湖州路の城北にある下山幻住禪庵の沙門である某甲〔が申し上げる〕。

右〔に述べた通り〕、某甲は謹んで丹衷を露し、洪造に上している。どうか哀憫を垂れ、鑑知を賜わりますように。

七月十五日、本師であられる釈迦如来がお定めになった〔夏安居の〕聖なる結制が円成する盂蘭盆の大いなる齋の日に遭遇した。夙生の父母や現世の父母、師長や檀越、〔四〕恩や〔三〕有、冤や親〔といった人々の中で〕、〔死後〕四つの生存形態をとりながら、六道の〔中でも餓鬼道や地獄道という〕悪しき趣の中にあって苦しんでいる衆生〔のありさま〕を思念してみるに、〔そこから〕解脱する由などない。今宵、謹んで香花、燈燭、茶菓、珍羞を當備して、〔釈尊の〕盂蘭盆經の法どおりに〔過去・現在・未来の三世に〕常住である〔仏法僧の〕三宝と法界の聖人賢者、僧侶道士に供養し、『大方広仏華嚴經』・『大乘妙法蓮華經』・『大方広阿闍多羅了義經』・『大仏頂如来密因修証了義諸菩薩万行首楞嚴經』・『維摩詰所説經』・『大乘金剛般若波羅密經』・『大乘方等金光明經』・『大乘般若密多仏祖海藏心經』・『大悲心円満秘密神呪』・『大仏頂万行首楞嚴神呪』を披閱して、摩訶仏母〔摩訶般若〕の聖号を稱揚し、〔法要の〕満散りに、清淨で平等、広大〔行きわたる〕甘露法食を一器、判施えた。

それらによつて集められた功德は、一心に、法界の内の天道にいる衆、人道にいる衆、修羅道にいる衆、地獄道にいる衆、餓鬼道にいる衆、畜生道にいる衆のために〔手向けるものである〕。どうか、仏の力に乗じて法筵に赴けますように。

一心に、過去・現在において〔仏の教えを〕引領え開導し、勸発提携し、方便〔をもちいて〕作成をし、親しく教えて剃髮させている、すべての師友や眷属のために〔手向ける〕ものである。〔どうか〕この真誠を鑑いただき、一緒に法会に趨けますように。

一心に、共に〔生活して〕いる僧侶道士の、各々の身体を生んでくれた〔現在の〕父母、過去七代の父母、及び爰劫（ありなき世）から〔我々に〕形（かたち）を受けさせ、積生（たねなま）に命を稟（たづ）けさせてくれた父母のために〔手向けるものである〕。どうか、仏の力に乗じて、一緒に甘露（あまみ）〔の恩恵〕を霑（あ）けられますように。

一心に、過去劫（おとむかし）〔の世界〕の中や、現在の世内（よこ）で、〔修行に必要な飲食・衣服・臥具・医薬の〕四つの事を供給していただく諸々の大檀越、及び法門（ほっ）を外護（ご）していただく王侯・宰相、路・州・県・鎮〔といった行政単位〕の文武官僚、長者や〔官僚の〕命婦（めい）、居士や善い友、道を問（と）い益（えき）を請（まね）う諸々の弟子たちのために〔手向けるものである〕。どうか、この済（す）に乗じて、一緒に法筵（ほっ）に降（くだ）ることができまますように。

一心に、九州分野（くしゅう）にいる十二種類の生きもののうち、遠くは余所（あま）〔の地〕方や、近くは当所（あま）〔の地域〕における、〔祭り手のない〕孤独な魂や〔成仏できずにこの世に〕滞（とど）っている魄（たま）、〔それも〕、男女老若、空中に居住しているもの水中や陸上〔に居住しているもの〕、鱗（うろこ）〔がある魚〕、甲（か）〔羅がある亀〕、羽（は）〔がある鳥〕、毛（け）〔がある獣〕、情（なさけ）がある〔生き〕もの、情（なさけ）が無いもの〔と違った違いに關係なく〕、すべての種類のもののために〔手向けるものである〕。どうか、一緒に仏の力に乗じて、共に法筵（ほっ）に赴（ま）けますように。

一心に、尽虚空（じん）、遍法界（へん）にある微塵（みじん）の刹土（しやく）の中（ちゆう）にいる、過去・現在および未来の諸々の含識（あ）たちで、あるいは苦しみの海に沈み、あるいは愛欲の河に溺れ、あるいは邪惡の林に住み、あるいは〔真理の光のない〕幽（く）い室（へや）に潜み、あるいは〔今にも水面に落ちそうな〕水（みづ）の際（きわ）に居（す）み、あるいは崖（がけ）の巔（たかね）から墮（お）ち〔そうになり〕、あるいは険（け）しい場（ば）に処（お）り、あるいは穢（けが）らわしい隙（すま）に栖（す）み、あるいは孔穴（あな）に居（す）り、あるいは冥（やみ）に滞（とど）つたもの、ないしは諸々の善くない処（ば）や衆（しゆ）もろの悪い聚（あ）の中（ちゆう）にいて、同じように業（ご）に纏（た）わられて悔（ば）悟（ご）を思うことなく、累（かさ）りに〔仏の〕良濟（りやう）に乗じてはいても、まだ〔迷〕界（かい）から超脱（あ）することを獲（と）ていないもののために〔手向けるものである〕。どうか、今夜の普（あま）き慈（じ）に乗じて、一緒に幾多（いくた）の生涯（じゆう）の重垢（じゆう）を〔落

とし)了(お)られますように。

右(の)ことを)、伏(かん)して以(か)えてみるに、諸(そ)仏(ぶつ)の心(こころ)の中(なか)にいる衆(しゆ)生(じやう)〔と〕、法(ほふ)界(がい)の海(うみ)に深(ふか)く沈(しん)んでしまふという業(ごう)を結(むす)んでいる衆(しゆ)生(じやう)の心(こころ)の中(なか)にある諸(そ)仏(ぶつ)〔と〕が、盂(ぶ)蘭(らん)盆(ぼん)における普(あまね)慈(じ)を興(おこ)すのである。一念(いつねん)に悟(さと)るか迷(まよ)うかによつて〔過去(こくご)・現在(げんざい)・未来(みらい)〕三(さん)際(さい)の苦(く)楽(らく)が成(な)るのであり、〔地(ぢ)獄(じやく)の〕刀(たう)山(さん)や劍(けん)穿(せん)も皆(みな)な等(とう)正(じやう)覺(かく)を成(な)就(じゆ)する場(ば)であり、〔浄(じやう)土(ど)の〕宝(ほう)玉(ぎよく)の大地(だいち)や階(かい)段(だん)も輪(りん)廻(かい)に飄(ひら)墮(だ)る域(いき)なのだ。自ら(みづか)り作り(つく)りだすところの業(ごう)は〔次(つぎ)々に〕変(へん)化(か)して極(ごく)まりがないし、心(こころ)法(ほふ)の出(あ)現(げん)れ方(かた)にも窮(きゆう)まりがない。だから古(こ)宿(じやく)は言(い)つていゝ、〔目(め)の前(まへ)に〕撲(さん)落(らく)してゐるのは〔仏(ぶつ)以外(がい)の〕他(た)の物(もの)ではない。縦(たて)〔と〕しての三(さん)世(せい)も横(よこ)〔と〕しての十(じゆ)方(ぽう)世(せい)界(がい)も〔要(よ)らぬ〕塵(ちり)ではない。山河(がわ)も大地(だいち)も、全(ぜん)てが法(ほふ)王(わう)の身(み)を露(る)してゐるのだと。こゝで目(め)を領(りやう)し、当(たう)處(ち)で帰(かへ)り着(ちやく)点(てん)である仏(ぶつ)法(ほふ)〕を知らなければ、諸(そ)々(ざ)の仏(ぶつ)弟(てい)子(し)の自(じ)心(こころ)を融(じゆう)合(ごう)して、大(だい)いなる涅(ねつ)槃(ぱん)の真(まこと)際(さい)に入(い)れ〔て〕しまふことができ、すべての處(ち)で厭(えん)うべき苦(く)も無(な)く、すべての處(ち)で喜(き)ぶべき樂(らく)も無(な)く、一(いつ)つ一(いつ)つの塵(ちり)〔へ〕のとらわれ〕は忘(わす)れられてしまひ、一(いつ)つ一(いつ)つの念(ねん)にある愛(あい)憎(そう)はきつと尽(つ)きて〔無(な)くなつて〕しまふ。〔そ)うなれば〕解(げ)すべき怨(うら)みも、依(たよ)るべき親(おや)しみもありはしない。煩(わづ)悩(なう)が悟(さと)りそのものであり、頓(とん)に大(だい)円(えん)鏡(きやう)智(ち)を証(しやう)するのだ。迷(まよ)いがそのまま解(げ)脱(だつ)であり、〔そ)のまま〕全(ぜん)部(ぶ)〔仏(ぶつ)の〕勝(しょう)功(こう)徳(とく)の身(み)を認(まこと)んでいるのだ。〔そ)うなれば誰(たれ)もが浄(じやう)土(ど)の〕紫(むら)の梅(ばい)檀(だん)〔紫(むら)の檀(だん)の裏(うら)で俯(うつむ)仰(あが)折(せつ)旋(げん)してゐる〕〔こと〕になる。〔川(か)の〕水(みづ)は流(なが)れて〔最(さい)終(しゆう)的(てき)には必(かならず)ず〕海(うみ)に在(あ)る〕といふことだ。〔誰(たれ)もが浄(じやう)土(ど)の〕紅(あか)い菌(か)菌(か)の花(はな)の間(ま)で見(み)聞(もん)覚(かく)知(ち)してゐる〕〔こと〕になる。〔月(つき)は落(お)ちても天(てん)を離(はな)れること〕はない〕といふことだ。〔ど)うか今(いま)この時(とき)に〕〔盂(ぶ)蘭(らん)盆(ぼん)に供(く)養(やう)された〕甘(あま)露(る)味(み)に飽(みた)されて、〔仏(ぶつ)がこ)の世(よ)にあらわれた〕しである〕優(う)曇(とん)華(か)が永(えい)劫(きやく)に出現(しゆげん)しますように。

恭(おん)しく惟(おも)うに、仏(ぶつ)心(しん)は〔こ)の法(ほふ)要(やう)を〕印(いん)知(ち)し、群(ぐん)靈(れい)は昭(あき)らかに〔こ)の供(く)養(やう)の場(ば)に〕格(かく)することであらう。

胃〔の様に衆生を守る〕功德〔をもたらすことを祈る〕文疏^ル

年月日

某庵沙門某 疏^ルす

*

(1) 大元国浙西道湖州路城北下山幻住禅庵沙門某甲〓湖州路は、太湖の南にある浙江省の呉興のこと。下山は弁山と同じで、大徳三年(一二九九)の冬、中峰明本がここに幻住庵を開いている。

(2) 恩有〓辞書類には見えないが、恐らく「四恩三有」の省略であろう。四恩は、父母の恩、衆生の恩、国王の恩、三宝の恩など、四種類の恩恵(『中村』p.509)。三有は、欲界・色界・無色界の三界における三種類の生存(同上・p.455)。

(3) 大乘般若密多仏祖海蔵心経〓未詳。『般若心経』のことであろうか。

(4) 披閱〓本や書類を開いてよく目を通す(『新字源』p.409)。『幻住清規』の「世範」条にも「披閱諸品経目」(Z111・489b)と「披閱」という語が用いられているが、同「清規」中の「疏」では經典を声を出して読誦する場合には全て「諷誦」という語が用いられており、明らかに口誦とは異なつたやり方を示す語と思われる。恐らくは『大般若経』の転読の様、実際には読誦しない簡略化された形式を指すものであろう。披閱する經典の中に、「楞嚴経」と「楞嚴呪」が重複しているのも不可解である。

(5) 摩訶仏母聖号〓『勅修百丈清規』卷二「且望藏殿祝讚」の大悲呪回向にも「称念摩訶仏母聖号」(P.8・1114b)とある。仏母は、①法をいう。②般若波羅蜜をいう。③釈尊の母であるマヤー(摩耶)婦人、あるいは姨母であるマハーブラジャーパティ(摩訶波闍波提)を指す。(『中村』p.1198) ころでは、披閱する際に、「般若心経」の末尾にある陀羅尼を唱えることであろうか。

(6) 滿散〓啓建の対。禅林で、法会を終わることをいう。法会が終わって一同が散すること。その終わる口を滿散の日と云う。(『中村』p.1288)

(7) 所以古宿云、撲落非佗物、縦横不是塵、山河及大地、全露法王身。『五燈会元』卷一〇「杭州興教洪寿禪師(九四四)一〇二二・天台德韶の法嗣」条(Z1338・1360c-d)に見える投機の偈。興教は薪が墮ちる音を聞いて省悟したとされる。「撲落」は「散乱する」の意(『中日大辞典』p.1492)。

(8) 水流元在海、月落不離天。『五燈会元』卷一六「福嚴守初禪師」条(Z1338・316d)、『続伝燈録』卷九「淨照道臻禪師」条(Z151・519c)、『卷二二「福嚴守初禪師」条(Z151・537a)、『建中靖国伝燈録』卷七「福嚴守初禪師」条(Z136・126d)。

(9) 印知||印可悉知の略。承認、認証すること。(『禪学大辞典』p.58) 經典の典拠としては、『大方广人如来智德不思議經』に「印知諸法」(T10・924c)とあるが、『禪苑清規』に「仰惟三宝咸賜印知」(卷一・Z111・441b)その他、

T81・55c、57b、58b、T82・327b、430aにも見える)とあるように「証知」と同意に用いられている。『幻住清規』中に「恭惟仏心印知、神靈昭格、謹疏」(491c)、「右、恭惟仏天印知、神龍昭假、謹疏」(492a、b)、「右、恭惟仏天印知、神龍昭格、謹疏」(492c、d)、「恭惟仏心印知、功德文疏」(492d、495b)などの用例がある。

(10) 胃||和刻本を見る限り衍字とも考えられるが、次注にもある通り「功德文疏」の内容を示す語とも取れる。だとすれば、字形が似ている「胃」と見て「胃みどのような」という意味に取るのが一番無難であろう。口語訳のみ字を入れ替えて訳してみた。

(11) 文疏||願文。願書。(『大漢和』巻五・p.587)「文疏」という語句は『幻住清規』中に特徴的に用いられており、同書中、この以外に「涅槃功德文疏」(Z111・490b)、「普門示現功德文疏」(490c)、「世尊功德文疏」(490c)、「楞嚴勝会啓建文疏」(491a)、「滿散祈晴道場文疏」(492b)、「滿散祈雨道場文疏」(492d)、「仏心印知功德文疏」(492d)、「仏心即(=印)知功德文疏」(495b)の七箇所用例がある。これによって、「功德文疏」とは文章の種類を示す語句であることが知られる。

〔封緘〕（疏を入れる封筒に書く文章）

【表面】

孟蘭盆齊普施法食功德奉為

封

湖州路下山幻住禪庵沙門某疏謹封

皮

生身父母六道四生一切恩有

【裏面】

上來羅列、大衆同伸

〔校注〕（二）恩_レ和刻本・統藏本ともに「思」に作るが意味不明。前の本文中に「恩有」という熟語が用いられ

ているし、「恩」の間違いと思われるので改めた。

*

【表面】

孟蘭盆に齊しく普く法食を施す功德は、

封

湖州路下山幻住禪庵沙門某疏謹封

皮

生身の父母、六道四生、一切の恩有の為にし奉る。

【裏面】

上来の羅列、大衆同に仲ぶ。

*

【表面】

孟蘭盆に齊しく普く法食を施す功德は、〔我が〕身を生んでくれた父母、

封

湖州路下山幻住禪庵の沙門 某 疏し 謹んで封す

皮

六道四生、一切の〔四〕恩〔三〕有のために〔手向けるものである〕。

【裏面】

上来列挙したことがらを、大衆が同に伸げる。

*

(一) 封皮 ① 封筒。包みの皮。帯封。② 封印。(『大漢和』卷四・三) 物に封をする印に用いる細長い紙の札。封じ紙。(『中大辞典』p.574)、「封条」条) ここでは折り畳んだ疏を入れるための封筒、もしくは回りを巻く帯封を指すものである。